

# 大瓜簀輪山貝塚における埋蔵文化財調査報告

—— 石巻市大瓜簀輪山貝塚における埋蔵文化財調査報告 ——

1995

石巻市教育委員会

# 序

東北地方の奈良・平安時代は、蝦夷と呼ばれた人々とその地域が、中央政府との大小さまざまな争乱を繰り返しながら、徐々に律令政治体系の中に組み込まれていった時代でした。この時代の石巻地方が、政治的あるいは文化的にどのような環境下にあったのかは、未だに多くの謎に包まれたままです。

平成5年、箕輪山貝塚を含む一帯での老人福祉施設建設の協議があり、現地踏査をしたところ、遺構の存在が想定されました。そこで、平成5年11月から翌平成6年3月にかけて、発掘調査を実施いたしました。その結果、奈良・平安時代の堅穴住居などが発見されました。

文化財は、先人の残した大切な文化遺産であり、現代に生きる私たちが守り、学び、そして後世に伝えて行かなければならぬものであります。これまで、石巻市の古代遺跡は、五松山洞窟遺跡、田道町遺跡の発掘調査が行われており、当時の様相が次第に明らかになりつつあります。今回の箕輪山貝塚の発掘調査で得られた数々のデータは、まさにその時代の生活の一端を垣間見せてくれたと言えましょう。そして、この発掘調査報告書が、私たちの郷土の歴史を明らかにして行く上で、新たな1ページを加えることになるものと確信いたしております。

最後に、箕輪山貝塚の発掘調査にあたり、特段のご配慮を賜りました地域住民の皆様、ご協力をいただいたかたがた並びに関係機関に、心から厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

石巻市教育委員会教育長 阿 部 宏

## 目 次

I. 調査経過 .....	1
II. 環境と立地 .....	1
III. 基本土層 .....	5
IV. 発見された遺構と出土遺物 .....	8
V. 考 察 .....	36
VI. 写真図版 .....	40

## 例 言

1. 本書は、石巻市福井地区老人福祉施設建設に伴う箕輪山貝塚の発掘調査の報告書である。
2. 土層等の色調表記については、「新版標準土色帳」9版（小山・竹原：1989. 5、日本色研株式会社）を利用した。
3. 本書の第1図および第25図は、建設省国土地理院発行1/50,000「石巻」の一部を使用した。
4. 本書の編集・執筆は、石巻市教育委員会社会教育課文化係木暮亮が行い、遺物実測図および拓本は、木暮亮、納谷幹男（社会教育課指導員）、目黒たみ子、不流和夫が作成した。
5. 出土した遺物および調査記録類は石巻市教育委員会が保管している。

## 調査要項

1. 遺跡名 箕輪山貝塚
2. 遺跡所在地 宮城県石巻市大瓜字棚橋
3. 調査対象面積 1,400m<sup>2</sup>
4. 調査主体 石巻市教育委員会
5. 調査期間 平成5年11月18日から平成6年3月31日
6. 調査担当 石巻市教育委員会社会教育課文化係  
木村 文雄 庄司 恵一 芳賀 英実 岡 道夫  
木暮 亮
7. 発掘作業員 相沢 敏郎 相澤利喜子 勝又 正男 鹿野 昌彦  
穀田 吉夫 西條 芳子 櫻田 逸子 長谷川信雄  
不流 和夫 目黒たみ子  
東北学院大学考古学研究部  
阿部 篤 石沢 直美 伊藤 健一 大浦 美樹  
大谷 基 片寄 有紀 鎌倉なほみ 河野 正和  
近藤 譲 斎藤 一彦 佐藤 鉄生 塩谷 慎介  
鈴木さおり 田中 政幸 千田 俊介 中野 恵  
長谷川 浩 橋口 真吾 山川 純一 山口 嶽  
8. 整理作業員 相澤利喜子 鹿野 昌彦 西條 芳子 不流 和夫  
目黒たみ子
9. 調査協力者 国立歴史民俗博物館 宮城県教育庁文化財保護課  
多賀城跡調査研究所 石巻専修大学  
石巻市建設部道路課 石巻文化センター  
石巻地区中高年雇用事業団  
平川 南 (国立歴史民俗博物館教授)

## I. 調査経過

### ＜発掘調査に至る経過＞

今回の調査は、石巻市大瓜字棚橋における稲井地区老人福祉施設建設に伴う埋蔵文化財調査として実施した。

平成4年11月に石巻市民生部社会課から石巻市教育委員会に対して、稲井地区老人福祉施設建設のための周辺整備事業として、市道(棚橋上台線)の拡幅計画があるという報告があった。旧大瓜小学校跡地を含む当該地域は、箕輪山貝塚(遺跡地名表番号65041)として登録されているため、石巻市民生部社会課に対して宮城県教育委員会と協議の必要性がある旨を回答した。

平成5年1月5日、石巻市から宮城県教育委員会あてに協議書が提出された。

協議の結果、平成5年11月から造構確認調査を実施することになり、同月18日から発掘区西側から確認調査を開始した。

### ＜調査の経過＞

調査区は幅約5m、長さ約120mの細長い区域であったために、調査区のほぼ全域の表土を重機により掘削し、確認調査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。これにより、調査区西側と東側において遺構および遺物を発見した。これにより、宮城県教育委員会、石巻市、石巻市教育委員会の三者で保存のための協議を行った結果、地形の制約により道路のルート変更が不可能であったため、作業を記録保存のための事前調査へと移行した。事前調査に着手した段階で発掘区に、国土軸に準拠する形で3m×3mのグリッドを設定し、西側から暫定的にA、B、C、D、E、F区として区割りを行い〔第4図〕、A・B区、C・D区、E・F区の各区域を同時進行する形で調査を進めた。

平成5年12月中は、A区、C区、E区を中心調査を進行した。特にA区においては、堅穴住居跡の断面剥ぎ取り作業なども行った。

平成6年1月に入り、調査は風雪を押して続行された。同月から3月までに残りの3地区的調査をほぼ完了し、3月6日に多数の市民及び圏域住民の参加のもとに現地説明会を行った。また、3月27日から同30日まで東北学院大学考古学研究部の野外実習も行い、同月31日に調査を終了した。

## II. 環境と立地

### ＜遺跡の位置と発見の経緯＞

箕輪山貝塚は石巻市の中央北部、旧北上川が東へと蛇行する北側にあり、龍峰山丘陵の南端

の標高約20mの斜面に位置している。

遺跡の発見は、昭和45年の土取りの際に貝層が発見されたことに端を発する。この貝層は、約7×5m程の規模で、厚さ約30cmのレンズ状堆積を呈しており、アサリ、ハマグリ、カキにより構成され、獸骨なども発見された。この貝層は、土取りの際に削平されてしまっている。今回の調査では、貝層はほとんど発見されなかった。また、茂木好光氏の報告<sup>[1]</sup>によれば、縄文中期大木9式および大木10式、後期南境式と奈良末から平安時代の所産と考えられる土師器および須恵器の破片の散布が確認されている。

今回の調査では、平安時代のものと考えられる遺構・遺物の発見が際立っており、貝塚は発見することができなかつた。また、当調査においても堅穴住居跡が検出され、市内では田道町遺跡に続く住居跡の発掘調査例となつた。

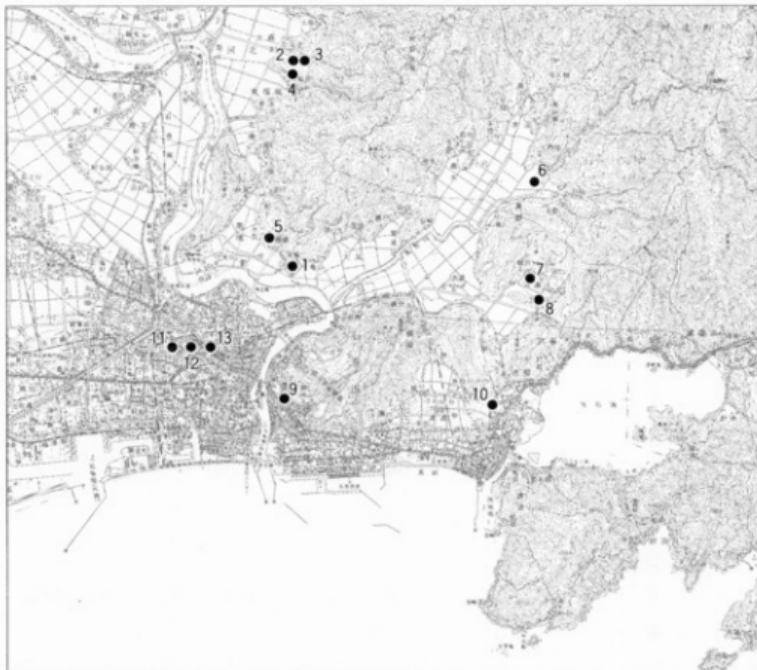
### ＜遺跡周辺の地理的環境＞

箕輪山貝塚が立地する龍峰山丘陵の南側斜面は、河南町及び河北町から南下して来た旧北上川が市の南境付近で東に方向を変え、さらに南方に蛇行する地域に面している。龍峰山丘陵は遠く北上山地に連続する一連の丘陵の南端に位置する尾根の一つである。遺跡の西側は、南境の沖積低地を挟んで粘板岩で構成されたトヤケ森山がある。南西には、丘陵直下から川にかかる開北橋にかけて自然堤防が存在し、さらには石巻市街の沖積平野が広がっており、東から南にかけては、稲井地区の水田地帯と牧山丘陵を望むことができる。稲井地区は古く縄文時代には海水が流入しており、古稲井湾と称され、沼津貝塚を始めとする各時代の遺跡も多数発見されている。

### ＜歴史的環境＞

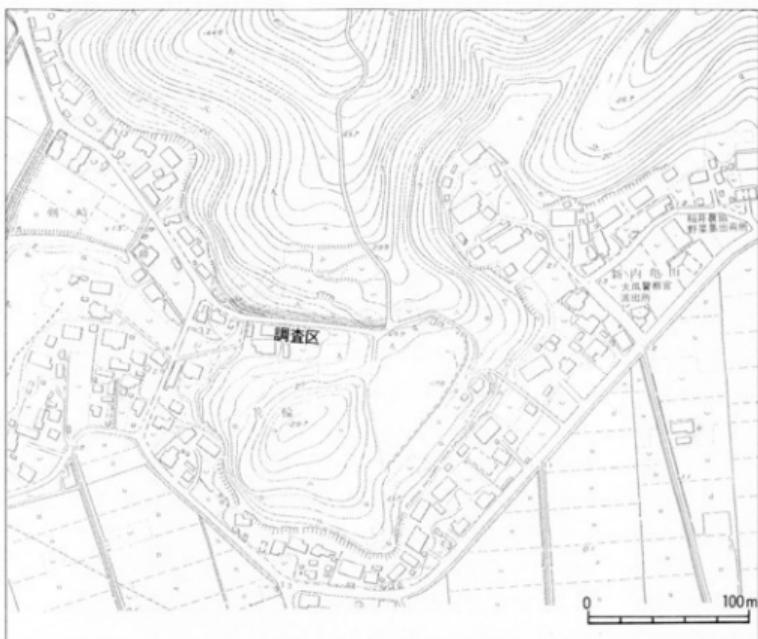
龍峰山丘陵の外縁部には、箕輪山貝塚の位置している丘陵を越えて北西に、河北町の東福田、大土A・B遺跡等の土師器、須恵器を出土する遺跡が存在し、市内へと南下するに従い、中世の館跡が数多く存在する。また、箕輪山貝塚西側には、縄文早～晩期の遺物が発見された南境貝塚がある。中世の館跡は遺跡の東から北東部にかけての丘陵縁辺部にも散在している。石巻市における奈良・平安時代の遺跡については、北西約700mの地点に水賀山遺跡が位置し、土師器、須恵器が発見されている。そこから東方約5.8kmの稲井地区真野に内原遺跡があり、土師器と須恵器が発見されている。さらに、そこから丘陵を挟んで南に約2kmの地点には縄文時代の遺物を大量に出土した沼津貝塚があり、ここからも土師器、須恵器が発見されている。また、沼津貝塚から北西約500mには、越田台遺跡も存在し、土師器および須恵器が出土している。これとは別に、海岸からの浜堤によって土地が形成されたところには、該期の遺跡も存在する。箕輪山貝塚と旧北上川を挟んで最も近い田道町遺跡がそれであり、堅穴住居や掘立柱建物跡と共に、古墳時代から平安時代までの遺物が発見されている。また、この遺跡からは「真野公」の銘が記された出舉の木筒が出土している。田道町遺跡のすぐ西には、横堤遺跡、東に

は清水尻遺跡も存在し、ともに土師器、須恵器が発見されている。さらに、南に目を向けると、牧山丘陵南西縁辺部に湊小学校遺跡があり、奈良時代の所産と考えられる蕨手刀が発見されている。一方、万石浦沿岸には、垂水圓貝塚も存在し、同様に蕨手刀や土師器、須恵器を出土している。特に万石浦沿岸においては、奈良時代から平安時代にかけて遺跡数が急増するという指摘<sup>(2)</sup>もある。また、大尻山遺跡は龍峰山丘陵の北側に位置し、近年、鉄鋤と羽口が発見された。



No.	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地図	出土品
1	箕輪山遺跡	石巻市大字字柳橋	丘陵斜面	集落	縄文・奈良・平安	山林	織文土器、土師器、須恵器、銅洋
2	東福岡遺跡	河北町東福岡	丘陵斜面	住居地	奈良・平安	樹	土師器
3	大土人遺跡	河北町大土	丘陵斜面	住居地	奈良・平安	樹	土師器、須恵器
4	大土人遺跡	河北町大土	丘陵斜面	住居地	奈良・平安	樹	土師器
5	木貫山遺跡	石巻市南郷字木貫山	丘陵裏	住居地	平安	山林等	土師器、須恵器
6	内原集落	石巻市真野字小山	丘陵	田園	縄文(?)・奈良(末)・平安	山林等	石器、土師器、須恵器
7	沼津貝塚	石巻市沼津字出内、字八幡口	丘陵	田園	縄文(前一塊)・佐良・奈良・平安	山林等	縄文土器、石器、骨角器、土師器、須恵器
8	越田山遺跡	石巻市沼津字越田	丘陵	住居地	縄文・奈良・平安	樹	縄文土器、土師器、須恵器
9	湊小学校遺跡	石巻市古野町	自然堤防	住居地	奈良	宅地	素手刀、土師器、須恵器
10	東木波日塚	石巻市東木	浜堤	田園	縄文(中)・佐生・古墳・奈良・平安・中世	樹・本田	縄文土器、佐生土器、須恵土器、上製品、土師器、須恵器、鐵手刀、陶器器
11	猿尾遺跡	石巻市新猿尾	浜堤	住居地	縄文(末)・奈良・平安	樹	土師器、須恵器
12	田道町遺跡	石巻市田道町	浜堤	集落等	古墳・奈良・平安	樹・元地	土師器、須恵器、土製品、木標、瓦製品、帶金具
13	清水尻遺跡	石巻市清水町	浜堤	古墳	平安	樹	土師器、須恵器、土製品

第1図 箕輪山貝塚周辺の遺跡



第2図 箕輪山貝塚周辺地形図

## 註

- (1) 茂木好光 1983(昭和58)年 「遺跡紹介 石巻市箕輪山貝塚を見て」  
('あをなく碧河> 第1号)
- (2) 三宅宗義 1988(昭和63)年 「第1章 自然環境と歴史的背景」  
('五松山洞窟遺跡 石巻市文化財調査報告書第3集」)

### III. 基本土層

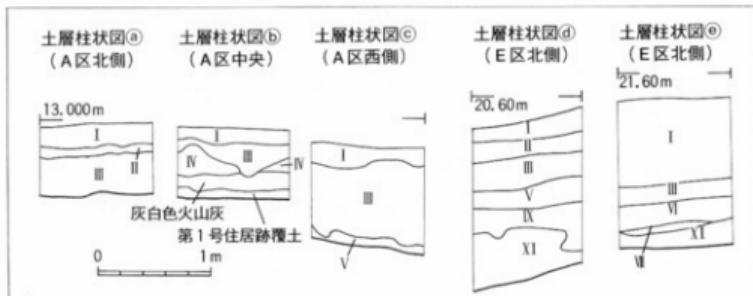
箕輪山貝塚の調査区は、地形的には丘陵縁辺部の急斜面に位置しており、東西に細長く、調査区西側と東側では、層序が異なっているため、A区における土層断面とE・F区におけるものによって、別個の基本土層を作成した。

#### ＜A区における層序区分＞

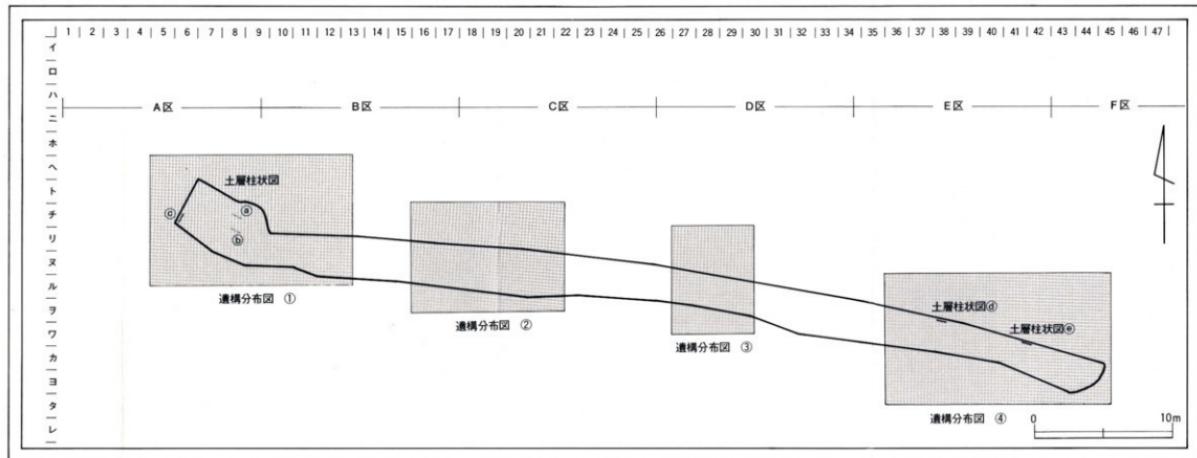
- [第Ⅰ層] 黄褐色シルト（2.5Y5/4）で黄色粒を多量に混入している。
- [第Ⅱ層] 黒褐色シルト（2.5Y3/2）で黄色粒を多量に混入している。
- [第Ⅲ層] 明黄褐色シルト（2.5Y6/6）で黄色粒を多量に混入している。（遺物包含層）
- [第Ⅳ層] 暗灰褐色シルト（2.5Y4/2）で黄色粒、礫を多量に混入している。
- [第Ⅴ層] 明黄褐色シルト（2.5Y6/6）で黄色粒、礫を多量に混入している。（地山漸移層）

#### ＜E・F区における層序区分＞

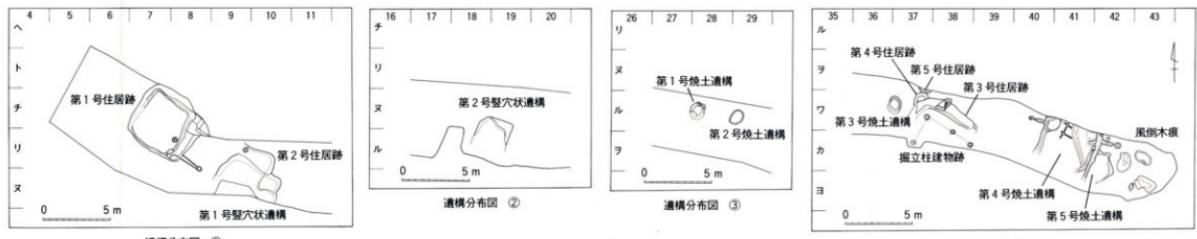
- [第Ⅰ層] 黄色土（10YR6/6）で、表土層（耕作土）である。
- [第Ⅱ層] にぶい黄褐色シルト（10YR6/4）で、土器、鉄滓、骨片等の遺物、大型の礫、凝灰岩の礫、赤色粒、炭化粒等を混入している。（耕作による攪乱層）
- [第Ⅲ層] 黒褐色シルト（10YR2/2）で、遺物、凝灰岩の礫、赤色粒、黄色粒を混入する。
- [第Ⅳ層] 暗褐色シルト（10YR3/3）で赤色粒、礫を混入する。
- [第Ⅴ層] にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）で土器、赤色粒、炭化粒をわずかに混入する。
- [第Ⅵ層] 棕褐色シルト（10YR4/4）で赤色粒、黄色粒、凝灰岩の礫を若干混入する。
- [第Ⅶ層] にぶい黄橙色シルトで赤色粒、黄色粒を混入する。
- [第Ⅷ層] 暗褐色シルト（10YR3/3）で凝灰岩の礫を混入する。
- [第Ⅸ層] 暗褐色シルト（10YR3/4）で凝灰岩の礫、赤色粒、炭化粒を混入する。
- [第Ⅹ層] 灰黄褐色シルト（10YR6/2）で大型の凝灰岩の礫を混入する。
- [第Ⅺ層] 黄色シルト（2.5Y8/2）で地山である。



第3図 箕輪山貝塚 調査区土層柱状図



調査区遺構分布図



第4図 遺構分布図

## IV. 発見された遺構と遺物

遺構としては、調査区西側（A・B区）と東側（E・F区）において、合計5軒の竪穴住居跡、調査区西側（B～C区）において2軒の竪穴状遺構、調査区東側（F区）において掘立柱建物跡、調査区東側（D～E区）において5基の焼土遺構を検出した。

特に、第1号住居跡は丘陵斜面の土砂を取り除き、その土砂によって人為的に平坦面を造成した上に構築されたと考えられ、東壁からは礎によって造られたカマドを2基検出した。また、住居跡の覆土には、灰白色火山灰が堆積していた。

焼土遺構には、再加熱を受けたと考えられる土器片に多量の焼土と炭化物を伴っている。

遺物としては、土器では土師器・須恵器の壺、甕、壺等が出土している。土師器の壺では、「生万」の墨書が記された土器が遺構外から発見された。また、土製品では、第1号住居跡から羽口とカマドの支脚が、第3号住居跡からカマドの支脚、遺構外から紡錘車が出土している。石器および鉄製品等では、第1号住居跡から大型の砥石と台石状の円形石器、凹石、刀子、釘が出土した他、鉄滓も発見されている。

### ＜第1号住居跡＞ [第5～第11図、第2～3図版、第6～8図版]

【位置・検出状況】第1号住居跡が検出されたA区は、地形的に重機の搬入が困難な場所であり、手掘りによってトレンチを掘削する調査方法を採用した。表土層の掘削を終了した段階で、リード7およびヌー8グリッドにおいて灰白色火山灰を確認した。この後、トレンチ東側（リード8グリッド）において岩盤を掘削して構築されている住居跡の壁および南側のカマドを確認し、住居跡の南側半分を検出するに至った。

第1号住居跡の北側は、A区のトレンチを拡張した結果発見されたものである。これにより、検出された住居跡は、リード7グリッドからヌー8グリッドにおよんでいることが判明した。

【重複・増改築】第1号住居跡には、明確な重複関係は認められなかった。しかし、住居跡の南側を検出した段階で、断面に第1号住居跡に切られる形で、遺構と考えられる立ち上がりと焼土層が発見された。この立ち上がりは、平面では全く検出されなかったため、断面のみの記録にとどめざるを得なかったが、当該住居跡以外に別な遺構が存在していた可能性も考えられる。また、住居跡の増改築は確認されなかった。

【平面形・規模】南北4.8m、東西5.0mの方形を呈する。

【堆積土】表土層直下に漸移層と考えられる黄灰（2.5Y5/4, 2.5Y6/6）色の比較的軟弱な土層が2層検出された。カマドを構成している礎は、この層中に存在しているため、これらの層は、住居跡の覆土と考えられる。この層の下に灰白色火山灰（2.5Y8/1）が濃密な堆積を呈している。この火山灰層は、住居跡のほぼ全域にわたって面的に検出されているが、中央部より北側の方が厚く堆積しており、水性堆積の様相を呈している。火山灰層のさらに下には、床面直上

に地山崩壊土と考えられる礫や焼上が混入した層（2.5Y4/3）が存在しており、全体的には、ほぼレンズ状に堆積している。

第1号住居跡のさらに南側の旧地形は、谷に向かって約3m程緩やかに傾斜し、そこから急激に落ち込む斜面となっている。住居跡の完掘後、床面直下の状態を調査したところ、旧地形では当初、竪穴住居跡中央部から斜面が始まっていることが確認された。このことにより、当該住居を造るにあたっては、下部の岩盤を掘削した上に、この斜面に土砂を入れて、平坦な地形を造成し、そこに構築していたことが判明した（第5図）。

【壁】住居跡の北壁は全て丘陵の斜面を利用した岩盤である。床面からほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高は、堆積土から判断して41.6cmと推定される。北壁には、工具により手が加えられたと推定される痕跡が発見された。西壁および南壁については、〔堆積土〕事実記載文中で説明した、竪穴住居構築の際に造成したと考えられる土砂によって形成されており、床面から比較的緩やかに外反して立ち上がる。最大壁高は、西壁で21.9cm、南壁で13.8cmである。

【床面】地山の岩盤を掘削し、人為的に土砂を入れ、床面を構築し貼床が形成されており、その厚さは最も厚い所で10cm、最も薄い所で2cmである。北東（山側）から南西（谷側）へ向かって若干の傾斜が認められるが、概ね平坦であり、凹凸はない。床面からは、土器の他、台石状の円形石器や凹石といった石器類が出土しており、カマド部分等からは支脚が出土している。

【柱穴】全く検出されなかった。第1号住居跡完掘平面図（第5図）において東側周溝付近に存在するピットは覆土の上面から掘り込まれたもので、住居跡には伴わないと解釈している。

住居跡北西区域には、一部岩盤が露出している部分が確認され、柱を配置した可能性があると推定し得る痕跡も若干認められた。

【カマド】第1号住居跡からは、東壁から2基のカマド（カマドA・B）が検出された。

カマドA（第6図）は住居跡の北東隅に位置し、燃焼部（袖を含む）から煙道部までが検出された。燃焼部は、拳大の角礫で袖を構築し、粘板岩製で50cm大の角礫で天井部を構成しており、その周縁を粘土により形成していた。これらの礫は、燃焼部を取り除いた後も発見され、さらにその下に周溝が掘り込まれており、暗渠を形成している。燃焼部は底面及び側壁内面、袖が加熱によって赤変し、奥行き54cm、幅35cmの規模を持ち、掘込みを伴う。また、燃焼部内面南壁付近からは支脚（第10図）が出土した。煙道部は断面「U」形を呈し、残存長60cm、最大幅12cmで、岩盤をくり抜いて構築されている。先端部および煙出しピットは削平されており不明である。

カマドB（第6図）は、住居跡の南東隅に位置しており、やはり燃焼部（袖を含む）から煙道部までが検出されている。燃焼部の規模は、奥行き60cm、幅20cmであり、内面は薄い板状の粘板岩製の礫により囲まれ、「U」形に近い形状を呈する。袖部および天井部にも礫が多数配置されている。これらの礫の間から粘土の痕跡が確認されている。このことから、カマドBは、かつては粘土によって成形されていたと推察される。カマドBの北側付近からは、長さ30cmの

砂岩製で大型の砥石（第11図）が発見された。また燃焼部の底面には、周溝に橋渡しする形で板状の礫が配置され、暗渠を形成している。煙道部は長さ70cm、最大幅15cmで、岩盤をくり抜いて構築されていたと考えられ、残存部分の深さは土層断面から判断して最大11cmあったと考えられる。また、先端からは煙出しのピットも検出されている。さらに、カマドBの煙道部および煙出しのピットおよび燃焼部からも焼土が発見されている。しかし、壁面等の赤変は確認することはできなかった。

【焼土範囲】住居跡中央北寄り（焼土範囲A）と中央南寄り（焼土範囲B）から検出され、明確な掘り込みを有していない。

焼土範囲Aは床面直上において確認され、45×60cmの不整形を呈し、炭化物と混在した形で検出された。そのすぐ北の同一面からは台石状の円形石器が出土しており、表面に赤化した鉄が付着していることから、何らかの因果関係が考えられる。

焼土範囲Bもまた床面直上において確認され、74×76cmの「匁」形を呈し、やはり炭化物と混在して検出された。焼けた範囲が床面直下までおよんでいるため、長期間にわたって使用されたか、あるいは強い火力により加熱されたことが推察される。

【周溝】西側の一部を除き、壁に沿って住居跡内を一周している。周溝内外には住居跡に伴う施設は検出されていない。

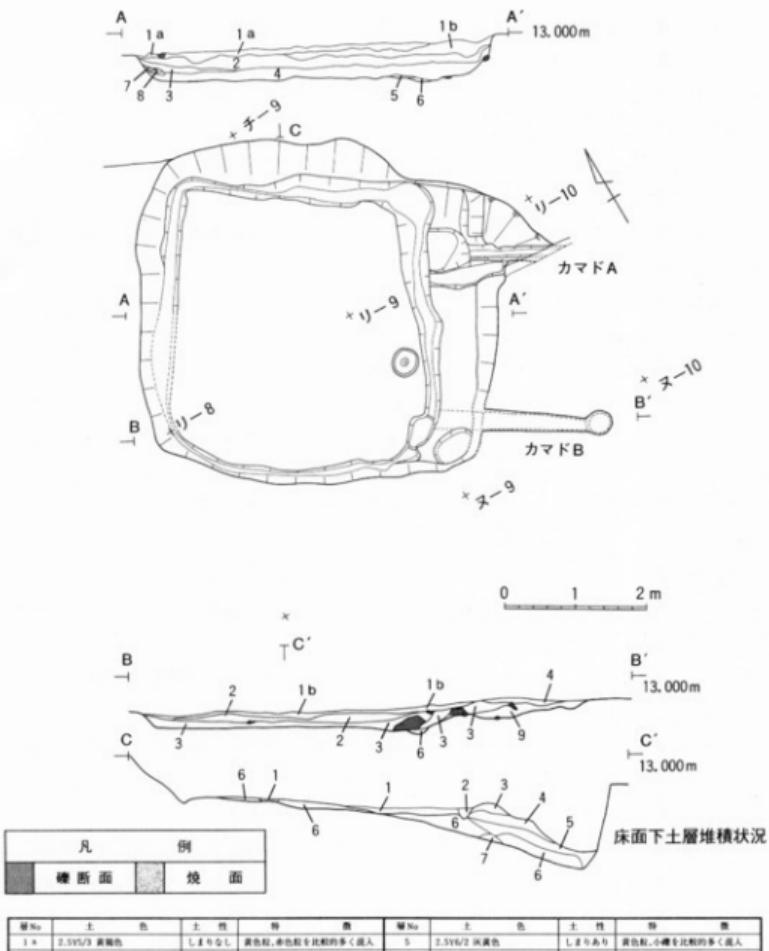
北側周溝は最大幅40cmであり、深さ12.2cmである。北東隅はピット状に広がっており、幅は45cmを測る。最も狭い部分では14cmであり、深さは5cmを測る。側周溝には長さ30~40cm程度の細長い礫が橋状に渡されており暗渠を形成している。

また、北西隅付近には小ピットが検出されている。北側周溝内からは須恵器壺、鉄刀子、鉄釘、支脚が出土しており、支脚はカマドA燃焼部から発見されたものと接合した。

西側周溝は幅30cmを測り、深さは5.6cmである。周溝の南側半分は検出されなかった。第1号住居跡では、北壁および南壁は斜面であり、東壁は2基のカマドが存在する。こういったことから推察すると、西壁のこの部分は入口ではないかと考えられる。

東側周溝は、住居跡東壁から50~60cm程離れた場所において検出された。北東および南西隅では、上面がカマドの礫により覆われていたが、これを完掘した段階で、周溝の全体を確認するに至った。北東および南西隅はピット状に掘り込まれており、この上にも礫が配置されていた。周溝の最大幅は40cmであり、最小は20cmある。深さは最も深い部分で12.2cm、浅い部分で11.6cmを測る。

南側周溝は、斜面を土砂で人為的に埋め、その上に掘り込まれたものである。幅は最も広い部分で30cm、狭い部分では16cmを測り、深さは、最深が8.1cm、最も浅い部分では6cmである。



第1号住居跡 土層観察表

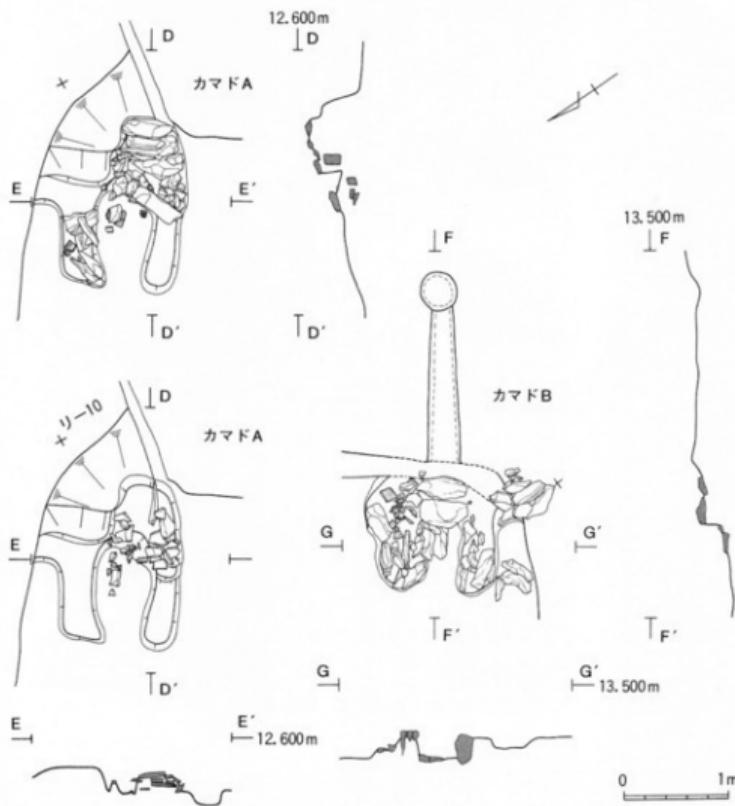
層No	土色	土性	特徴	層No	土色	土性	特徴
1-a	2.5Y5/3 黄褐色	しまりなし	黄色粒、赤色粒を比較的多く混入	5	2.5Y6/2 深黒色	しまりあり	黄色粒、小礫を比較的多く混入
1-b	2.5Y4/2 細粒黃色	しまりあり	赤色粒を比較的多く混入	6	2.5Y6/3 に深い黄色	しまりあり	黄色粒、小礫を比較的多く混入
2	2.5Y6/1 深紅色	しまりなし	赤色粒のみ混入	7	3Y4/2 深オリーブ色	しまりなし	褐色を多量に混入
3	2.5Y5/4 黄褐色	しまりあり	黄色粒、赤色粒、小礫を多量に混入	8	3Y4/1 黄色	しまりなし	黄色粒、鐵土を多量に混入
4	2.5Y6/3 オリーブ褐色	しまりあり	黄色粒、赤色粒、小礫を多量に混入	9	3Y4/2 オリーブ色	しまりあり	黄色粒、鐵土を多量に混入

第1号住居跡床面下 土層観察表

第5図 第1号住居跡

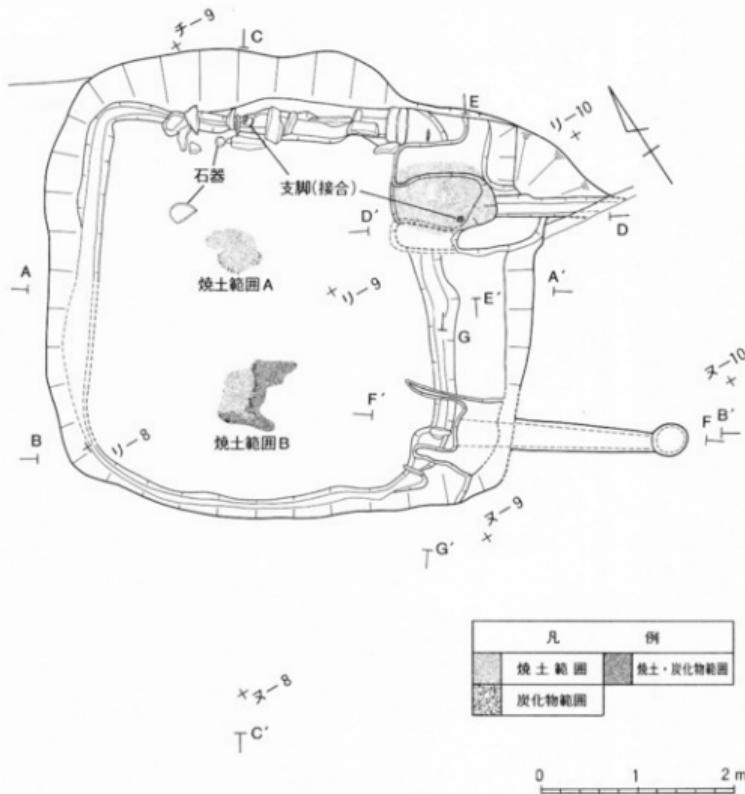
地 理 的 方 向	地 理 的 位 置 ・ 主 柱 穴	壁 厚 度	カ マ ド A	カ マ ド B	固 定 處	備 考
南北軸 4.3m 東西軸 5.0m 面積 19.5m <sup>2</sup> 床面標高 12.3m	南北軸 N - 25° E 東西軸 東 西 面 積 N - 56° W	N 東 西 北 南	東 1.0m - 6.6m 西 1.1m - 21.5m 南 3.6m - 13.8m 北 41.6m - 58.3m	壁厚部 北側 標準部 南側 壁厚部 北側 標準部 南側	壁 厚 度 40.0m - 20.0m 35.0m 20.0m 壁厚部 北側 標準部 南側	最大幅×最小幅 12.3m × 11.6m 5.6m - 5.3m 40.0m - 14.0m 30.0m - 16.0m 8.1m - 6.0m
		(E=残存部分)				・地土範囲A：自原跡中央 北寄り：45×60m 不整 形 ・地土範囲B：自原跡中央 南寄り：34×76m (H)

第1号住居跡 観察表 [ ( ) は、残存・推定規模]



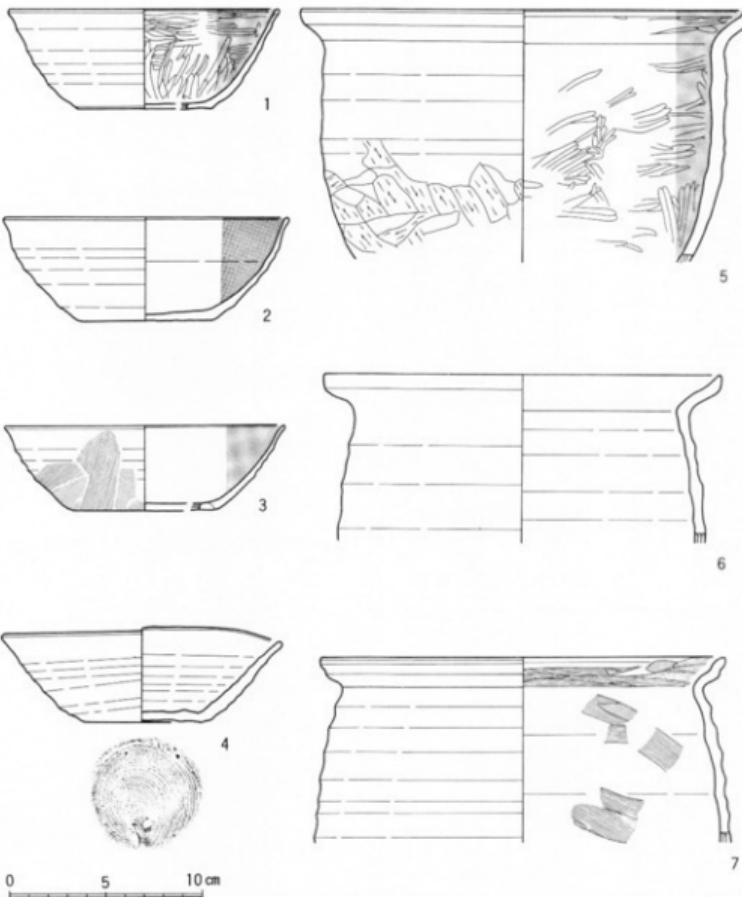
凡 例	
壁 断 面	土 器

第6図 第1号住居跡カマドA・B平・断面図



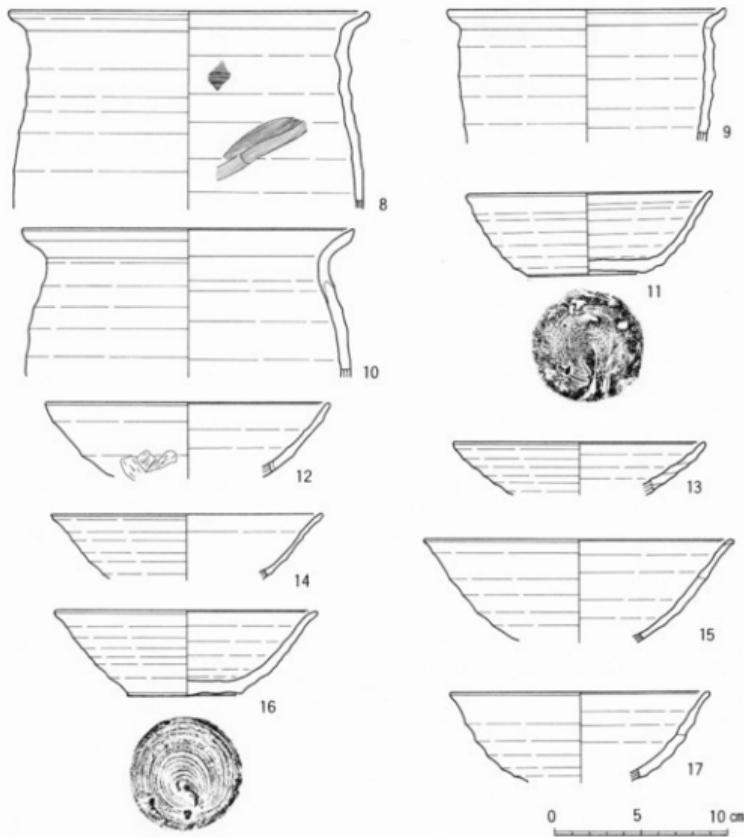
第7図 第1号住居跡 遺物分布図

**【出土遺物】**土師器、須恵器、石器、鉄製品、支脚が出土している。土師器はカマドAを中心にして出土しており、壺、甕の破片である。須恵器は北側周溝内から完形の壺が出土した。石器は、床面出土の台石状の円形石器と、北側周溝付近から出土した凹石、カマドBの袖付近から発見された砥石である。台石状の円形石器と砥石には、鉄の付着が認められる。鉄製品として主なものは、北側周溝内から出土した鉄釘とカマドA燃焼部付近から発見された鉄刀子である。支脚は北側周溝内とカマドAから出土したものが接合した。



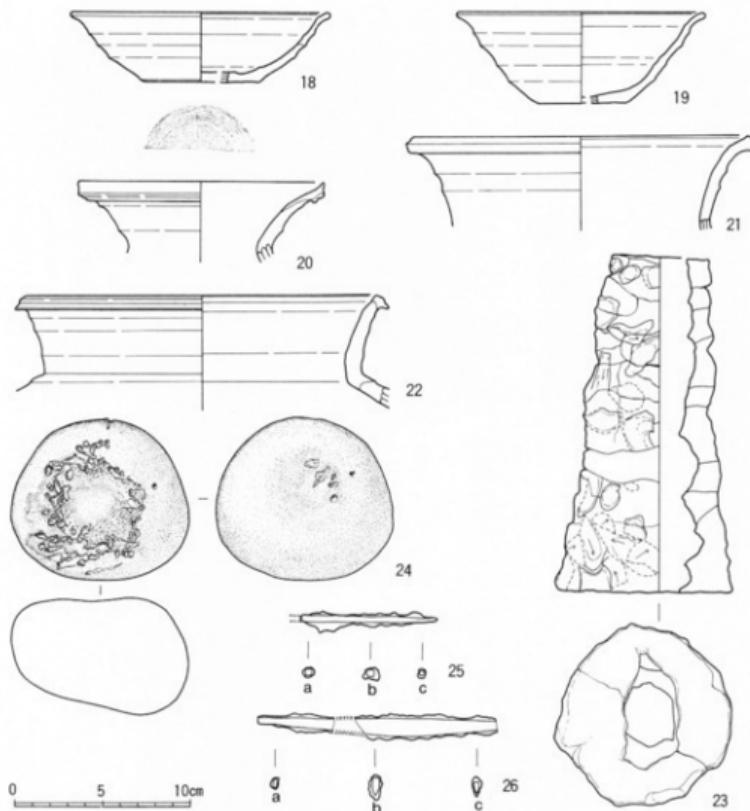
No.	器種	器形	出土場所	外 壁 溝 繋			内 壁 溝 繋			正 像 ( - )			写真図版	
				口 線 部	体 部	底 部	口 線 部	体 部	底 部	部 高	口 径	底 径		
1	土器	杯		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	縫合未切り	ロクロナデ →黑色研磨	ロクロナデ →黑色研磨	3.1	14.0	7.0	1/4	7-1
2	土器	杯		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	5.4	14.6	6.8	1/4	
3	土器	杯		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	縫合未切り→	黑色処理	黑色処理	4.4	14.4	7.4	2/3	
4	土器	杯		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	縫合未切り	ロクロナデ	ロクロナデ	4.9	14.5	6.0	3/4	7-3
5	土器	甕	セマドA	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ →黑色研磨	ロクロナデ →黑色研磨	(22.9)	23.2	—	1/8	
6	土器	甕	セマドA	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	(4.7)	20.6	—	1/10	
7	土器	甕	セマドA	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ →カラナデ	ロクロナデ →カラナデ	(9.5)	21.0	—	1/10	

第8図 第1号住居跡 出土遺物① [( )は、残存・推定数値]



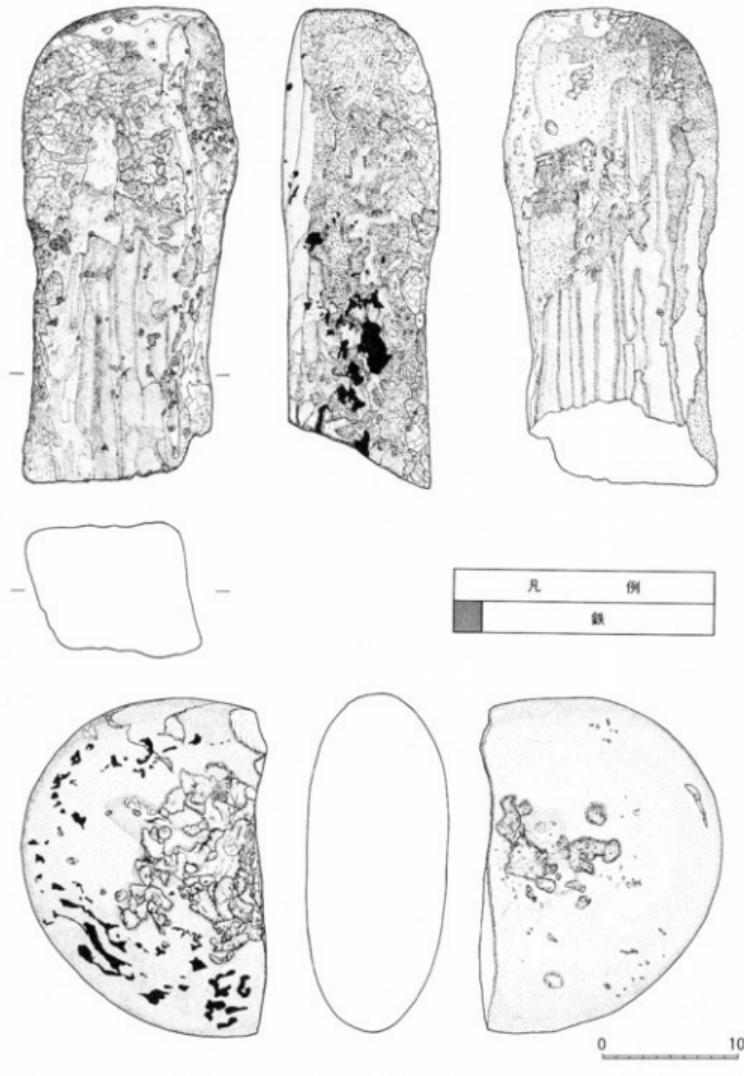
No.	器種	形態	出土場所	外面調査			底面	内面調査			法算( cm )	残存	写真図版	
				口縁部	全体部	底部		口縁部	全体部	器高	口径	底径		
8	土器	素	カマドA	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ →ハラナゲ	-	(11.3)	20.9	-	1/10
9	土器	素	カマドB	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	(7.4)	16.2	-	1/10
10	土器	素	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	(8.5)	19.2	-	1/10	
11	梳齿器	环	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	回転あわせ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロ整形	4.7	14.2	6.7	4/5 7-2
12	梳齿器	环	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	(4.3)	16.4	-	1/10	
13	梳齿器	环	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	(3.8)	14.6	-	1/10	
14	梳齿器	环	カマドB	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	(3.7)	15.8	-	1/5
15	梳齿器	环	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	(5.8)	18.0	-	1/8
16	梳齿器	环	カマドA	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロ整形	回転あわせ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロ整形	4.9	15.2	6.6	完 7-4
17	梳齿器	环	カマドB	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	(5.2)	15.0	-	1/10

第9図 第1号住居跡 出土遺物② [ ( ) は、残存・推定数値]



No.	器種	器形	出土場所	外観調査			裏面	内観調査			法算 (cm)	残存	写真図版
				口縁部	体部	底部		高さ	口径	底径			
18	陶器	杯		ロクロナギ	ロクロナギ	ロクロナギ	圓錐形切口	ロクロナギ	ロクロナギ	ロクロナギ	3.9	14.8 (6.6)	1/5
19	陶器	杯		ロクロナギ	ロクロナギ	ロクロナギ	—	ロクロナギ	ロクロナギ	ロクロナギ	3.1	14.2 (5.0)	1/5
20	陶器	甕		ロクロナギ	—	—	ロクロナギ	—	—	—	(4.5)	14.0	1/10
21	陶器	甕		ロクロナギ	—	—	ロクロナギ	—	—	—	(5.4)	19.2	1/5
22	陶器	甕		ロクロナギ	—	—	ロクロナギ	—	—	—	(4.4)	20.0	1/10
23	器種	出土地点	高さ(cm)	上部径(cm)	下部径(cm)	外観調査等	裏面	内観調査等	法算(cm)	参考	残存	写真図版	
24	支脚	北側周溝・カマドA	15.0	5.6	11.2	輪様み、表面粗朩、二次焼成	輪様み、表面粗朩、二次焼成	輪様み、二次焼成	—	—	—	全	7-6
No.	器種	出土地点	最大径(cm)	最小径(cm)	最大厚(cm)	外観調査等	裏面	内観調査等	法算(cm)	参考	残存	写真図版	
25	鉄製刃	セマドA	(7.30)	(0.4)	(0.4)	(0.3)	(0.4)	(0.4)	(0.3)	断面丸形	9/10	写真図版	
26	鉄製刀子	北側周溝	(13.4)	10.45	(1.0)	(0.6)	(0.25)	(0.4)	(0.3)	—	9/10	7-5	

第10図 第1号住居跡 出土遺物③ [( ) は、残存・推定数値]



No.	器種	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	表面調査等	側面調査等	裏面調査等	石材	残存	写真回数
27	石斧	カラマ A	(34.0)	(25.0)	(11.6)	敲打部、擦痕、剥離、斜材等	敲打部、擦痕、剥離、斜材等	敲打部、擦痕、剥離、斜材等	砂岩	9/10	8-9
No.	器種	出土地点	最大径(cm)	最小径(cm)	最大厚(cm)	表面調査等	側面調査等	裏面調査等	石材	残存	写真回数
28	台状石刀		24.7	(17.0)	10.4	敲打部、擦痕、剥離、斜材等	擦痕、剥離、斜材等	敲打部、擦痕、剥離、斜材等	砂岩	2/3	8-9

第11図 第1号住居跡 出土遺物④〔( )は、残存・推定数値〕

## ＜第2号住居跡＞ [第12図、第3図版]

【位置・検出状況】調査区西側B区、リー10、ヌー10、11グリッド内において検出された。

【重複・増改築】第2号住居跡は、大部分が削平されてしまっており、北東隅部分を残すのみである。増改築等は認められていない。

【平面形・規模】第2号住居跡は、残存部分東西1.95m、南北2.6mを呈し形状は判然としない。恐らく方形を基本とした形狀を呈すると考えられる。

【堆積土】第2号住居跡の覆土はほとんど削平されてしまっており、床面直上の堆積土を残すのみである。床面直上の堆積土は2層検出され、炭化物を混入する暗褐(10YR3/3)色土層の下に炭化物層が存在している。そのため、これらの層は、第2号住居跡を構成するプライマリーな層ではなく、何らかの施設に伴う層であると推測される。

【壁】北壁と東壁の一部を残す。大部分が削平されてしまっており、残存壁高は3cmから4cmと極めて薄い。

【床面】ほぼ平坦である。西側部分に覆土の上面から掘り込まれたと考えられるピットが検出されている。

【柱穴】全く検出されていない。

【カマド】検出されなかった。

【焼土範囲】北壁隅付近に比較的大型の礫を伴って検出された。長軸80cm、短軸60cmを呈し、掘り込みは伴っていない。焼土の範囲は北壁までおよんでおり、カマドの一部である可能性もある。

【周溝】全く発見されなかった。

【出土遺物】出土していない。

## ＜第1号竪穴状遺構＞ [第12図、第3図版]

【位置・検出状況】調査区B区、リー10,11、ヌー10,11、ルー11グリッドにおいて北側半分が検出された。

【重複・増改築】北側壁において第2号住居跡を切っている。増改築等は認められない。

【平面形・規模】残存部分4.5×2.2mを測る隅丸方形と考えられる。

【堆積土】上面はほとんど削平され、擾乱土が流入しており、床面直上の土層が2層存在しているのみである。第1層は褐(10YR4/6)色土であり、黄色粒、炭化粒および焼土を混入している。第2層は暗褐(10YR3/4)色土であり、やはり黄色粒、炭化粒および焼土を混入している。

【壁】北壁全体と西壁、東壁の一部が検出された。北壁は残存高58~29cmを測り、一部段を形成して外反気味に立ち上がる。西壁は、残存高46~31cmを測り、外反して立ち上がる。東壁は残存高57~50cmを測り、外反して立ち上がる。

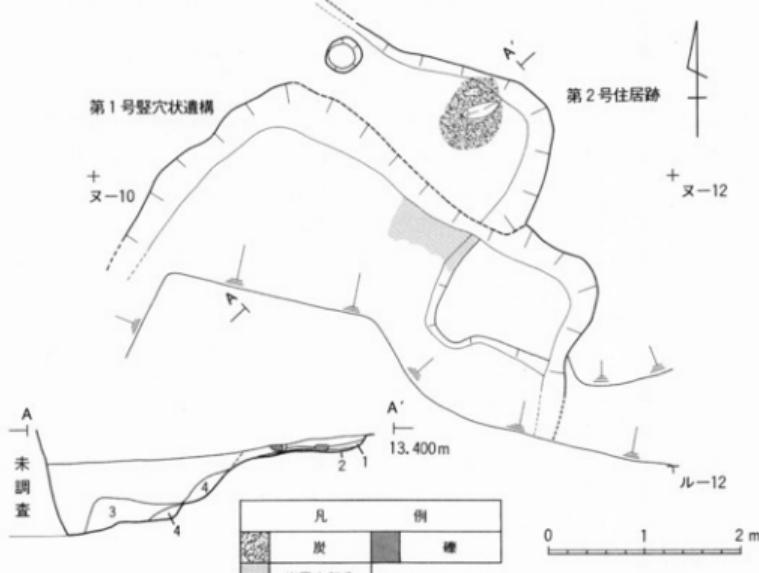
【床面】北側が低く、南側が高い。比高差は約14cmである。北側中央、北壁と接する場所に岩盤が露出した部分が認められる。また、北東隅には方形の高まり(床面との比高差約19cm)が確認

された他、南西隅も若干高くなっている。この他に、床面には、付属施設等は認められなかった。

【柱穴】発見されていない。

【周溝】確認されなかった。

【出土遺物】出土していない。



第12図 第2号住居跡・第1号竪穴状遺構

編号	上 色	土 性	特 徴	編号	上 色	土 性	特 徴
1	10YR3/3暗褐色	しまりあり	黄色料、炭化粒を混入(第2号住居跡)	3	10YR4/4褐色	しまりあり	黄色料、炭化粒、植土を混入(第1号竪穴状遺構)
2	10YR1.7/1黒色	しまりなし	炭化物層(第2号住居跡)	4	10YR3/4褐色	しまりあり	黄色料、炭化粒、植土を混入(第1号竪穴状遺構)

第2号住居跡・第1号竪穴状遺構 土層観察表

規 模	方 向	残 存・主 程 式	壁残存高	セ マ ド	回 覆	重複間隙(六→前)	備 考
南北幅 (1.30m)	南北向		N	東37.0cm~33.0cm 西 なし	壁 不明 燃焼部 なし 煙道部 なし	最大幅×最小幅 東 なし 西 なし	第2号住居跡・第1号竪穴状遺構
東西幅 (1.30m)	N=36°E						
面 積 (2.50m <sup>2</sup> )	東西向						
床面標高	14.4m						
		(2)=残存部分)					

第2号住居跡 観察表 [( ) は、残存・推定規模]

規 模	方 向	残 存・主 程 式	壁残存高	セ マ ド	回 覆	重複間隙(六→前)	備 考
南北幅 2.4m	南北向		N	東37.0cm~30.0cm 西46.0cm~31.0cm	壁 不明 燃焼部 なし 煙道部 なし	最大幅×最小幅 東 なし 西 なし	第2号住居跡・第1号竪穴状遺構
東西幅 4.30m	N=36°E						
面 積 7.8m <sup>2</sup>	東西向						
床面標高	12.45m						
		(2)=残存部分)					

第1号竪穴状遺構 観察表 [( ) は、残存・推定規模]

### 〈第3号住居跡〉 [第13図～第14図]

【位置・検出状況】調査区東側E区、ワ-38、39、40、カ-38、39、40グリッド内において北側壁と西側壁の一部が検出されたのみである。

【重複・増改築】掘立柱建物跡に切られ、また、北壁北西隅も第3号焼土遺構に切られている。  
増改築等は認められなかった。

【平面形・規模】残存規模東西4.9m、南北2mを測る。形状は判然としない。

**【堆積土】** 土層の堆積は自然堆積の状況を呈する。第1層は黒褐(7.5YR3/1)色シルト層であり、黄色粒、赤色粒と若干の炭化物を混入する。第2層はa、b二つに分層され、2a層はにぶい黄褐(10YR5/3)色シルトで黄色粒、赤色粒と若干の炭化物を混入する。2b層は床面直上の遺物包含層であり、やはりにぶい黄褐(10YR4/3)色シルトで黄褐色粒を混入する。第3層は周溝の埋土で、遺物を多量に含み黄色粒、赤色粒と炭化物を混入する黒褐(10YR3/2)色シルトである。第4層は住居跡の貼床であり、にぶい橙(7.5YR6/4)色シルトで黄色粒、赤色粒を混入する硬質な層である。

【壁】北壁全体と西壁の隅が部分的に検出された。壁は外側に傾斜して立ち上がり、高さは52cmを測る。

【床面】 ほぼ平坦である。北壁から南南西約80cmまでの部分に硬質面が検出され、貼床と考えられる。西側壁付近に大型の礫が発見されたが、住居跡に伴うものかどうかは不明である。

【柱穴】全く発見されなかった。

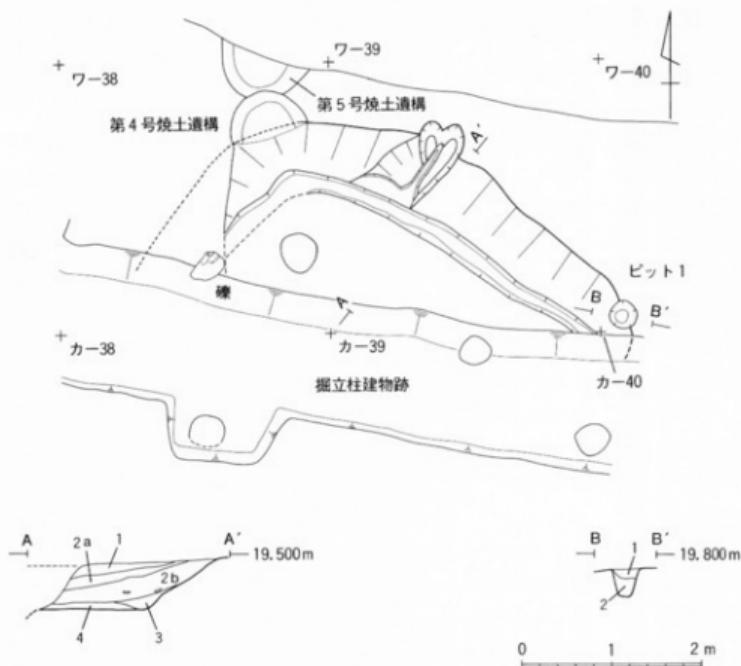
【カマド】北壁中央西寄りに溝状の掘り込みを確認したが、燃焼部、煙道部のみが検出され、煙出しのピット等は発見されていない。燃焼部は、残存部東西70cm、南北20cmであり、掘り込みは極めて浅く約2cmである。焼土、炭化物等は全く検出されていない。煙道部は長さ1.1mを測り、掘り込みが先端で三つに分かれる。恐らく複数の造り替えがあったものと推測される。幅は最も狭い部分で10cm、広い部分で20cmを測る。深さは10cm程度である。

【周溝】北壁に沿う形で周溝が存在している。最大幅は25cm、最も幅の狭い部分で14cmを測る。深さは3cmとほぼ一定している。

【出土遺物】第3号住居跡からは、土師器と須恵器の壺、甕の破片が若干出土しているが、どれも小片で、図示し得るものはなかった。

地 方	方 向	残 存・主 柱	壁 残 高	カ マ ア ー ジ ー ス	固 定 部	通 路	重 複 開 口(古-新)	備 考
西北側 (4.9m)	西北側		N	東 なし	往 來 不明	最 大 幅 前 小 幅	通 路 浅	第3号住居跡
西南側 (2.3m)	S-30°E		S 西 なし	便 道 部	東 なし	東 なし	なし	なし
面 積 (7.5m <sup>2</sup> )	東北側		南 なし	便 道 部	西 なし	西 なし	なし	第4号住居跡
床面標高 20.8m	S-45°W		北20.8m-47.0m	便 道 部	東 3.0m-~1cm	3.0m-1.0m	上連廊	
		(2)-残存部分			南 なし	なし		

第3号住居跡 観察表〔( )は、残存・推定規模〕



第13図 第3号住居跡

層No	土色	土性	特徴	層No	土色	土性	特徴
1	7.5W3/1黒褐色	しまりなし	縄状の縫、黄褐色、赤色粒をわずかに混入	3	10Y3/2黒褐色	しまりなし	縄状の縫、赤色粒を混入し灰化粒をわずかに混入(縦溝壁土)
2 a	10Y5/7に5Y1-3黄褐色	しまりなし	縄状の縫、赤色粒を混入し、灰化粒をわずかに混入	4	7.5W6/4C-6Y1-4褐色	しまりあり	縄状の縫、赤色粒を混入(縦溝)
2 b	10Y6/7に5Y1-3黄褐色	しまりなし	縄状の縫を多く混入し、褐色を多量に混入。				

第3号住居跡 土層観察表

層No	土色	土性	特徴	層No	土色	土性	特徴
1	2.5W6/4C-6Y1-4褐色	しまりなし	縄状の縫、赤色粒を混入	2	7.5W4/1褐色	しまりなし	縄状の縫、赤色粒を混入

ピット1 土層観察表



No	器種	器形	出土場所	外面調査			内部調査			法量 (cm)	口径	底径	残存	予測回数
				口縁部	体部	底部	内縁部	底部	側面					
1	土鍋器	坪	ロクロナド	ロクロナド →黑色研磨	ロクロナド →黑色研磨	—	—	ロクロナド →黑色研磨	ロクロナド →黑色研磨	(4.0)	15.2	—	(1/ 6)	
2	土鍋器	坪	ロクロナド	ロクロナド →黑色研磨	ロクロナド →黑色研磨	—	—	ロクロナド →黑色研磨	ロクロナド →黑色研磨	(4.1)	14.4	—	(1/ 10)	

第14図 第3号住居跡 出土遺物 ( ( ) は、残存・推定数値)

## ＜第4号・5号住居跡＞ [第15図～第16図、第3図版]

【位置・検出状況】調査区E、F区、ワ-41、42、43、カ-41、42、ヨ-42、43グリッド内において検出された。

【重複・増改築】第4号住居跡南東部カ-42、43、ヨ-42、43グリッドにおいて、第5号住居跡を切っている。また、第4号住居跡東側周溝が二重の重複関係にあり増改築と考えられる。住居跡の増改築は断面においても確認された。

【平面形・規模】第4号住居跡は、東西4.5m、南北は確認された部分で3.1mの隅丸方形であると推測される。第5号住居跡は、残存長東西1.7m、南北2.1mの隅丸方形を呈する。

【堆積土】第4号住居跡の堆積土は2層に分けられる。第1層は暗褐色(10YR3/3)色シルトであり、黄色粒、赤色粒、炭化粒が混入しており、遺物も多く混在している。第2層は黒褐色(10YR2/3)色シルトであり、黄色粒、炭化粒を混入する他、土器等の遺物も数多く含んでいる。

【壁】第4号住居跡の壁は、住居跡西側及び東側において検出された。西壁は13cmから9cmの高さを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。東壁は17cmから5cmの規模を有し、やはりほぼ垂直に立ち上がる。第5号住居跡の壁は、北側、東側において確認され、4～20cmの高さを測り、やや外反して立ち上がる。

【床面】第4号住居跡において、北側と南側で約3cmの比高差が認められるが概ね平坦であり、凹凸は認められない。第5号住居跡もまた、5cm程度の比高差が認められるが、概ね平坦である。

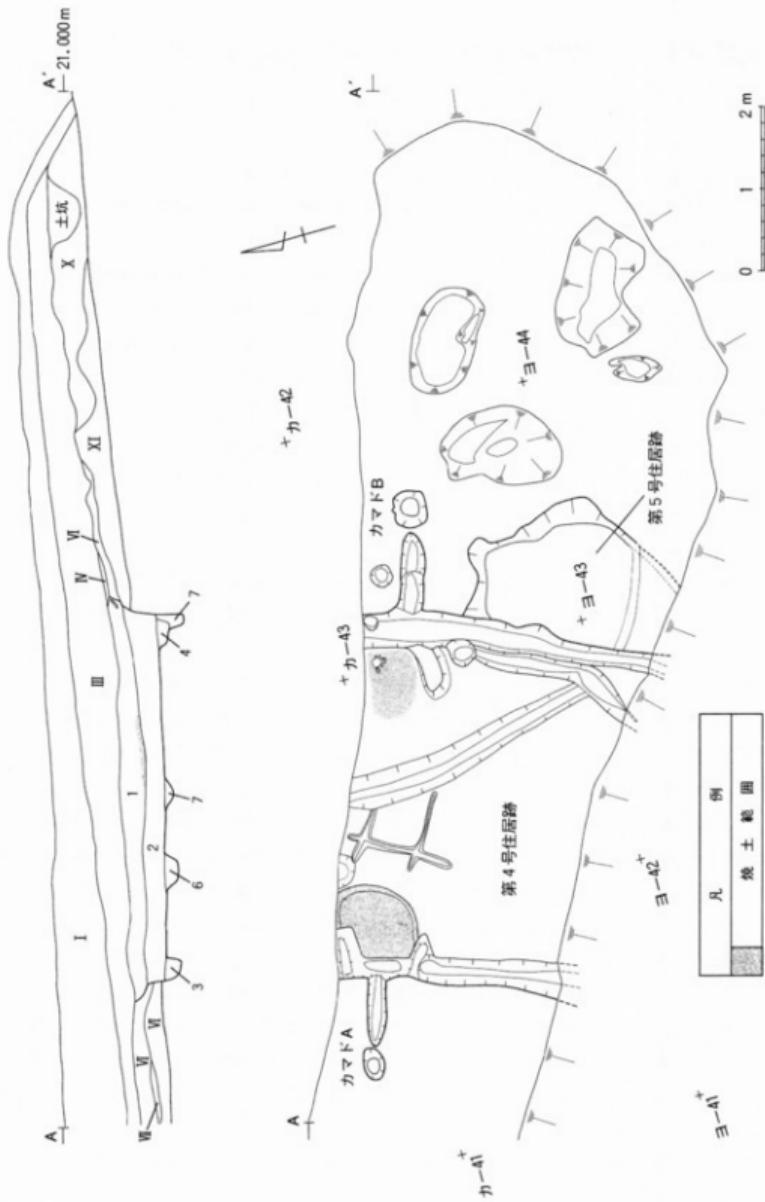
【柱穴】第4号、5号住居跡とも全く検出されなかった。

【カマド】第4号住居跡においては、住居跡西壁北側、調査区北壁と接する部分に1基(カマドA)および住居跡東壁北側に1基(カマドB)検出され、合計2基のカマドが検出された。カマドAは、燃焼部(袖を含む)から煙道部までが検出された。燃焼部は、残存規模1×0.9mの楕円形を呈し、底面に焼土範囲が認められた。掘込みは伴っていない。煙道部は長さ1.5m、最大幅20cmで、煙出しピットも検出されている。カマドBも、やはり燃焼部(袖を含む)から煙道部までが検出されている。燃焼部の規模は、86×60cmを呈し、底面に焼土範囲が認められた。また、掘込みは伴っていない。煙道部は長さ2m、最大幅30cmで、先端からは煙出しのピットも検出されている。第5号住居跡からはカマドは発見されていない。

【周溝】第4号住居跡においては、西壁および東壁に沿って確認された。西側周溝は、残存部分で45～30cmの幅をもち、深さは14～16cmを測る。東側周溝は残存部分で、42～20cmの幅をもち、深さは43～21cmを測る。西側には、もう一本の周溝が発見された。恐らく、第4号住居跡の拡張に伴う際の古い周溝であると推察される。この周溝は、西側カマド(カマドB)脇から南方向へ調査区外へとおよんでおり、幅が32～15cm、深さ11～8cmを測る。第5号住居跡からは、周溝は、全く確認されなかった。

【出土遺物】第4住居跡から土師器、須恵器の壺と壺の破片が出土しているが、どれも小片で図示し得るものはなかった。

第15図 第4号・5号住居跡

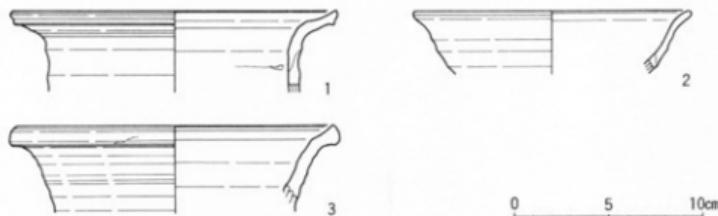


No.	土色	土性	骨	No.	土色	土性	骨
I	10YR6/5明黄褐色	しまりなし	灰土層	2	10YR2/3黒褐色	しまりあり	麻田岩の塊、赤色粒、遺物、炭化粒を混入。(第4号住居跡黒土)
Ⅱ	10YR2/2黒褐色	しまりあり	麻田岩の塊、赤色粒、遺物を混入	3	2.5Y7/0明褐色	しまりあり	麻田岩の塊を混入(第4号住居跡内無机土壤上)
Ⅲ	10YR4/4褐色	しまりあり	麻田岩の塊、赤色粒を混入	4	2.5Y6/0明褐色	しまりあり	麻田岩の塊を混入(第4号住居跡内無机土壤上)
Ⅳ	10YR6/3.5-4.5-5褐色	しまりなし	麻田岩の塊、赤色粒を混入	5	2.5Y6/0褐色	しまりあり	麻田岩の塊を混入(第4号住居跡内無机土壤内ビート土上)
V	10YR6/3.5-4.5褐色	しまりなし	麻田岩の塊、赤色粒を混入	6	2.5Y7/0明黃褐色	しまりあり	麻田岩の塊を混入(ビート土上)
VI	2.5Y6/0明褐色	しまりなし	麻田岩の塊を混入	7	2.5Y6/4.5-5褐色	しまりあり	麻田岩の塊を混入(ビート土上)
VII	2.5Y6/0褐色	しまりあり	地山(麻田岩の若駒)骨、炭化粒を混入	8	10YR2/3.5-4.5-5褐色	しまりなし	麻田岩の塊が多く混入し、赤色粒も混入(壁面土出現)
IX	10YR3/2黒褐色	しまりあり	麻田岩の塊、赤色粒、遺物、炭化粒を混入(壁面土出現)				

第4号住居跡等 土層観察表

規 模	方 向	残 高	主 材 元	壁 基 高	カ マ ド A	カ マ ド B	回	通	重複関係(古→新)	備考
南北幅 3.1m	南 北 幅			東 3.0m~13.0m	回 壁 西側 北側	壁 基 高 北側	(内側周溝)	幅	第5号住居跡	
東西幅 4.5m	N - 22° E			西17.0m~12.0m	燃焼部 1.1m (1.0m)	燃焼部 0.3m (0.24m)	(外側周溝)	幅	1	
面 積 (14.1)m <sup>2</sup>	南 西 幅			南 なし			(内側周溝)	幅	第4号住居跡	
床面標高 20.0m	S - 67° W			北 なし			(外側周溝)	幅	(底) 張	
				(23=残存部分)						

第4号住居跡 観察表 [( )は、残存・推定規模]



No.	器種	形態	出土場所	外 壁 調 整	底	内 壁 調 整	底	量 (cm)	残存	写真出版
1	土器部	便	口 極 部	ロクロナダ	ロクロナダ	—	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(1/100)
2	底更部	便	ロクロナダ	ロクロナダ	—	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	(1/100)
3	底更部	便	ロクロナダ	ロクロナダ	—	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	(1/100)

第16図 第4号住居跡出土遺物 [( )は、残存・推定数値]

規 模	方 向	残 高	主 材 元	壁 基 高	カ マ ド	回	通	重複関係(古→新)	備考
南北幅 2.1m	南 北 幅			東20.0m~13.0m	回 壁 不明				
東西幅 (1.7)m	N - 26° E			西 なし	燃焼部 なし	東 なし	なし	第5号住居跡	
面 積 (2.8)m <sup>2</sup>	南 西 幅			南 なし		西 なし	なし	4	
床面標高 20.7m	S - 66° W			北22.0m~ 7.0m	燃焼部 なし	北 なし	なし	第4号住居跡	
				(23=残存部分)		南 なし	なし		

第5号住居跡 観察表 [( )は、残存・推定規模]

## ＜第2号竪穴状遺構＞ [第17図]

【位置・検出状況】調査区C区、ヌー19、20、ルー19、20グリッドにおいて北側3分の2が検出された。

【重複・増改築】認められなかった。

【平面形・規模】残存部分2.5×1.8mの隅丸方形と考えられ、遺構の南側は削平されている。

**【堆積土】** 堆積土は7層に分けられた。第1層から第6層までは、褐色または暗褐色を基調とするシルト質の土層（1層10YR3/4, 2層10YR4/4, 3層10YR3/4, 4層10YR3/3, 5層10YR3/3, 6層10YR4/6）であり、黄色粒および赤色粒を混入する。第7層は床面直上の層でにぶい黄褐色（10YR5/4）色を呈し、黄色粒と礫を多量に混入する。

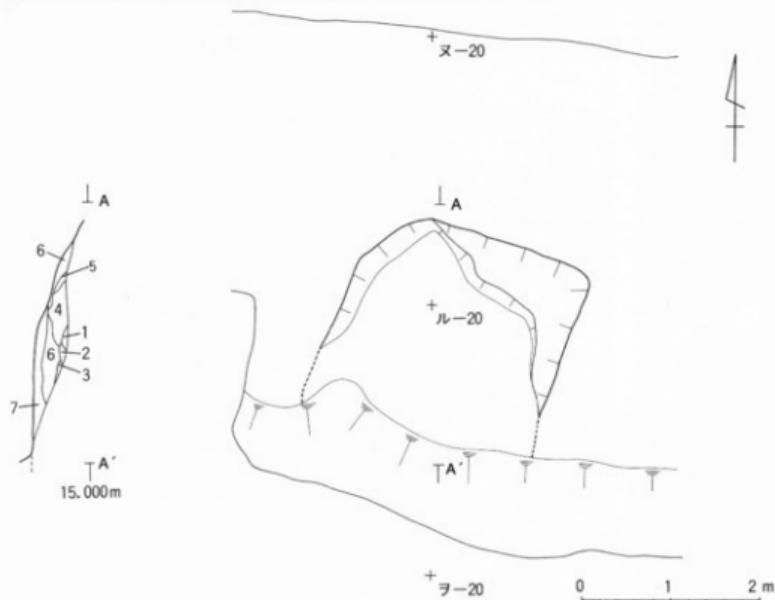
**【壁】** 北壁と西壁、東壁が検出されている。

**【床面】** ほぼ平坦である。付属施設等は何ら検出されていない。

**【柱穴】** 発見されていない。

**【周溝】** 確認されなかった。

**【出土遺物】** 土師器および須恵器の壺、甕等の破片が出土している。



層番	土色	土性	特徴	層番	土色	土性	特徴
1	10YR3/4 塩褐色	しまりあり	赤色粒を混入	5	10YR3/3 塩褐色	しまりあり	黄色粒を4層より多量に混入
2	10YR3/4 塩褐色	しまりあり	黄色粒を多量に混入	6	10YR4/6 褐色	しまりあり	褐灰岩の礫を多量に混入
3	10YR4/6 褐色	しまりあり	黄色粒を多量に混入	7	10YR5/4 にぶい黄褐色	しまりなし	褐灰岩の礫を混入
4	10YR3/3 塩褐色	しまりあり	黄色粒、赤色粒を少量混入				

第2号竪穴状遺構 土層観察表

規格	方 向	残 高	主柱穴	壁 残 高	カ マ ド	周 围	事 業 間 隙 (古一新)	備 考
西北壁	2.5m	西 北 壁		東	なし	南	無 不明	
北西側	1.8m	N - 18° E	西	なし		東	無	
南 壁	5.5m	東 西 壁	南	なし		西	なし	
床面標高	14.38m	N - 70° W	北	なし	標高部	北	なし	
		(2=残存部分)				南	なし	

第17図 第2号竪穴状遺構 [ ( ) ] は、残存・推定規模]

## ＜掘立柱建物跡＞ [第18図]

【位置・検出状況】調査区東側E区、ワ-38、39、カ-38、39グリッドで検出された。

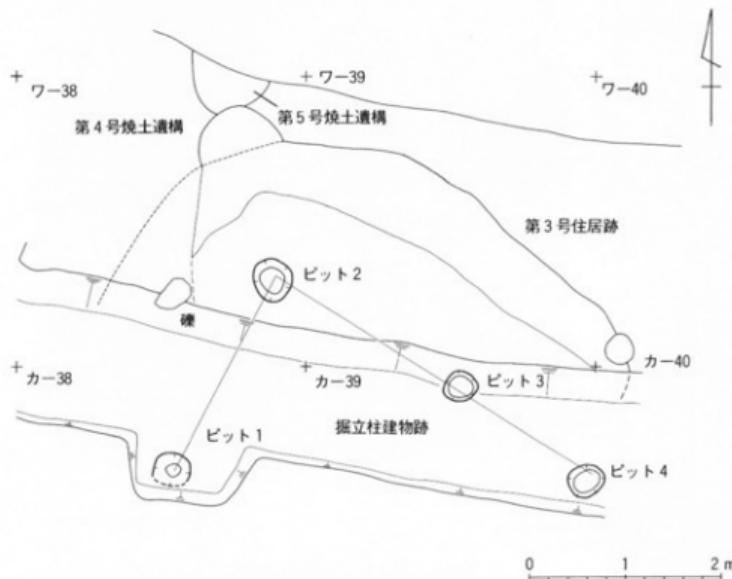
【重複】柱穴列北東側において、第3号住居跡に切られている。

【規模】桁行、梁行とも判然としない。柱間は南北方向の南から、ピット1～2間が2.2m、東西方向の西からピット1～3間が2.2m、ピット3～4間が1.7mである。

【柱穴】掘り方は、長軸44～32cm×短軸40～32cmの規模を測る梢円形である。また深さは7～20cmを測る。

【埋土】ピット1は黒褐色を基調とし、ピット2は明黄褐色である。ピット3はにぶい黄橙色を基調とし、ピット4は暗褐色である。

【出土遺物】須恵器の破片が出土しているが、小片であるため器種、器形等は判然としない。



	柱番号	P-1	P-2	P-3	P-4
	平面形	梢円形	梢円形	梢円形	梢円形
東 西	(2間 4.0m)	幅 約	40.0×30.0cm	44.0×32.0cm	30.0×32.0cm
南 北	(1間 2.3m)	深 度	7.0cm	8.0cm	10.0cm
方 向	N-50°-W	堆積土	10YR5/7(黒褐色)	10YR7/6(明黃褐色)	10YR4/4(にぶい黄橙色)

第18図 掘立柱建物跡 [( ) は、残存・推定数値]

## 〈第1号焼土遺構〉 [第19図、第4図版]

【位置】調査区D区、ル-28、ル-29グリッドにおいて検出された。

【重複関係】遺構の北東部分外縁部および南部が擾乱によって消失している。

【規模・形態】推定規模1.1×1.0mの楕円形を呈し、底面の深さは25cmを測る。

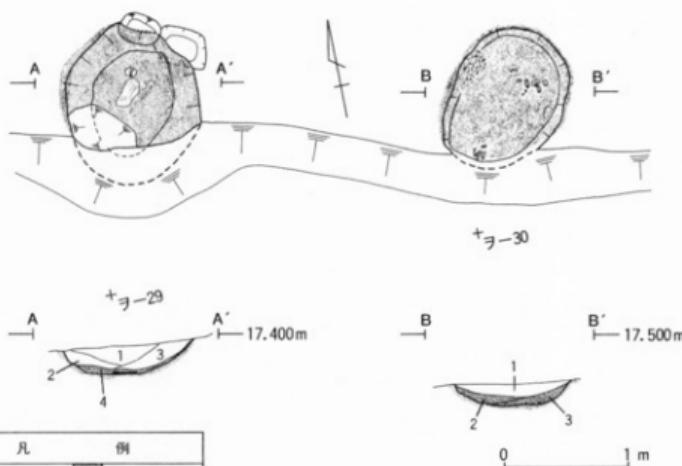
【堆積土】黒褐色を基調とする自然堆積の様相を呈している。

【内面の状況】ほとんどの部分が焼けた赤化しており、底面直下約6cmにまでおよぶ。底面中央部に炭化物が集中する傾向が認められ、炭化粒、炭化材を含む。

【出土遺物】底面からは、土師器の小片がまとまって出土した。小片のため、器種等は判然としないが、二次焼成を受けている。

## 〈第2号焼土遺構〉 [第19図、第4図版]

【位置】調査区D区、ル-29、ル-30グリッドにおいて検出された。第1号焼土遺構の東側約1mの地点に位置している。



第19図 第1・2号焼土遺構

層	土	色	土性	特	質	層	土	色	土性	特	質
1	10YR3/1黒褐	しまりあり	褐色岩の塊、塊、黄色粒を混入する	3	3	10YR2/2黒褐	しまりあり	褐色岩の塊、塊、黄色粒を混入する			
2	10YR2/1黒褐	しまりあり	褐色岩の塊、塊、黄色粒を混入する	4	5YR5/3に近い赤褐	しまりあり	黄色粒、鐵土を混入する				

第1号焼土遺構 土層観察表

層	土	色	土性	特	質	層	土	色	土性	特	質
1	10YR2/3黒褐	しまりあり	褐色、黄色粒、赤色粒を若干混入する	3	10YR2/3黒褐	しまりあり	褐色、鐵土を混入する				
2	10YR2/2黒褐	しまりあり	褐色、黄色粒、赤色粒を若干混入する								

第2号焼土遺構 土層観察表

【重複関係】 遺構の南側外縁部が攪乱によって若干消失している。

【規模・形態】 推定規模 $1.1 \times 1.0$ mの楕円形を呈し、底面の深さは22cmを測る。

【堆積土】 黒褐色を基調とする土で自然堆積の様相を呈している。

【内面の状況】 ほとんどの部分が焼けて赤化している。底面の赤化は、底面直下約6cmまでおよんでいる。底面においては、炭化物および炭化材の集中が目立つ。

【出土遺物】 土師器の小破片がまとまって出土した。小片のため、器種等は判然としないが、二次的に焼成を受けている。

### ＜第3号焼土遺構＞ [第20図、第5図版]

【位置】 調査区E区、ワード37、ワード38グリッドにおいて検出された。

【重複関係】 重複関係は認められない。ただ、遺構の南側約半分は、攪乱によって消失してしまっている。第3号焼土遺構には、作り替えと考えられる部分が発見された（焼土遺構A・焼土遺構B 第20図）。

【規模・形態】 焼土遺構Aは、推定規模 $0.7 \times 0.5$ mの楕円形を呈し、底面の深さは36cmを測る。焼土遺構Bは、推定規模 $0.8 \times 0.5$ mの楕円形を呈し、底面の深さは35cmを測る。

【堆積土】 黒褐色を基調とするもので、レンズ状の自然堆積の様相を呈する。また、焼土遺構Aには硬質面が2面、焼土遺構Bには硬質面が1面発見された。

【内面の状況】 内面は、全体がほぼ完全な形で熱を受けており、焼けて赤化している。

【出土遺物】 土師器の小破片が若干ではあるが出土しており、二次焼成を受けている。

### ＜第4号・5号焼土遺構＞ [第20図、第5図版]

【位置】 調査区F区、ワード39、ワード39グリッドにおいて検出された。

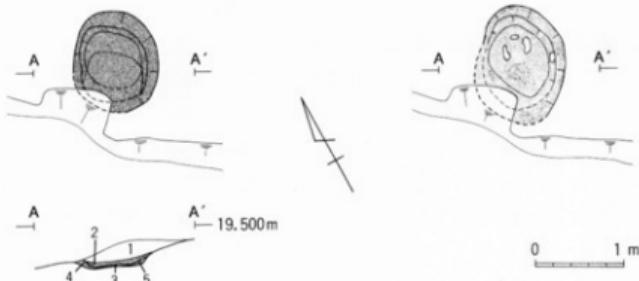
【重複関係】 第4号焼土遺構北側縁辺部分と第5号焼土遺構の南側縁辺部分において切り合ひ関係が認められ、第4号焼土遺構が第5号焼土遺構を切っている。

【規模・形態】 第4号焼土遺構は推定規模 $1.6 \times 2.0$ mの楕円形を呈し、底面の深さは15cmを測る。第5号焼土遺構は、推定規模 $0.9 \times 2.0$ mの楕円形を呈し、底面の深さは40cmを測る。

【堆積土】 第4号、第5号焼土遺構とも、黒褐色を基調としている。

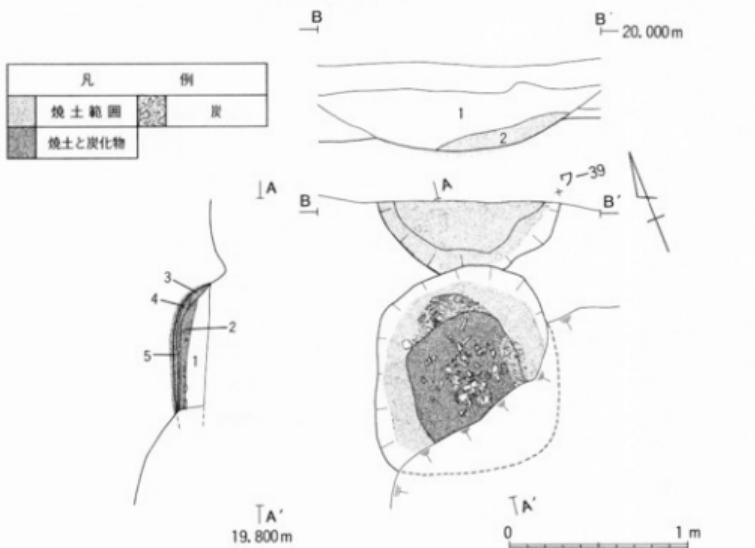
【内面の状況】 第4号、第5号焼土遺構とも、焼成面は底面直下にまでおよんでいる。特に第4号焼土遺構からは、多量の炭化粒に伴って、多くの炭化材が出土した。また、第4号焼土遺構は炭化物層と遺物層が互層になっており、このことから、底面と考えられる部分が2面以上あったと考えられる。

【出土遺物】 土師器の小片が出土しており、二次焼成を受けている。



層号	土色	土性	特徴	層号	土色	土性	特徴
1	10YR3/4暗褐色	しまりあり	赤色粒、焼土粒、炭化物を多量入。	3	10YR3/3暗褐色	しまりあり	焼土モ若干、炭を多量に混入(塊体)
2	10YR4/6褐色	しまりあり	黄色粒を少量、焼土を多量に混入。	4	10YR3/4暗褐色	しまりあり	焼土モ若干、炭を多量に混入。

第3号焼土遺構 土層観察表



層号	土色	土性	特徴	層号	土色	土性	特徴
1	7.5YR3/3暗褐色	しまりあり	褐色岩の塊を多く混入し、赤色粒を少量入。	4	7.5YR3/1黒色	しまりなし	炭化物跡(2次的な鉄鉱)
2	7.5YR3/3暗褐色	しまりあり	赤色粒、炭化物を少量成入し、透水性あり。	5	7.5YR3/1黒色	しまりなし	炭化物跡(鉄鉱)
3	7.5YR3/3暗褐色	しまりあり	赤色粒、焼土、炭化物の斑点層				

第4号焼土遺構 土層観察表

層号	土色	土性	特徴	層号	土色	土性	特徴
1	10YR2/3黒褐色	しまりなし	褐色岩の塊、赤色粒、炭化物、青色粒と石英粒、帶片を混入。	2	10YR3/1黒色	しまりあり	褐色岩の塊を多量に混入、赤色粒、炭化物を混入。

第5号焼土遺構 土層観察表

第20図 第3号・4号・5号焼土遺構

名 称	第1号焼土遺構	第2号焼土遺構	第3号焼土遺構	第4号焼土遺構	第5号焼土遺構
子 地 形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形
規 模 (m)	(1.1) × 1.80 × 0.25	(1.0) × 1.10 × 0.22	1.3 × 1.0 × 0.30	(1.6) × 2.0 × 0.15	(0.9) × 2.0 × 0.4

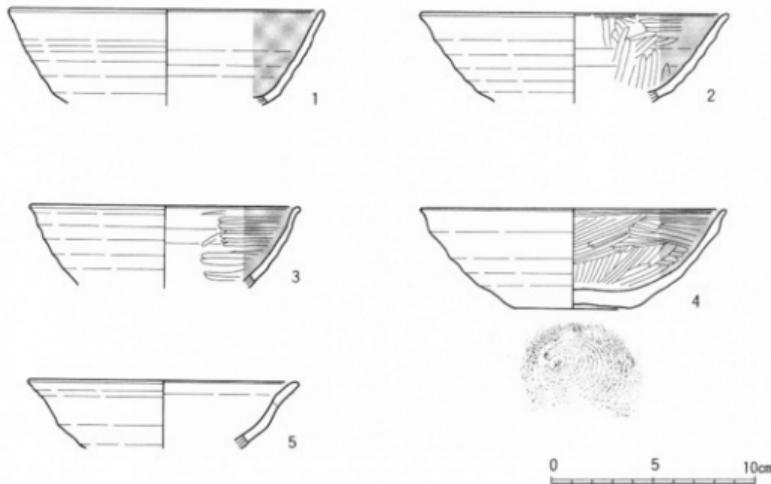
焼土遺構 観察表 [( ) は、残存・推定数値、規模数値 (東西) × (南北) × (深さ)]

## 〈グリッド内出土遺物および遺構外出土遺物の概要〉 [第21図～第26図、第9図～第10図版]

ここでは、明確にグリッド内から出土しているものに関してはグリッド内出土遺物とし、遺物包含層以外の地点や、調査区外から発見されたものに関しては遺構外出土遺物として記載することとする。

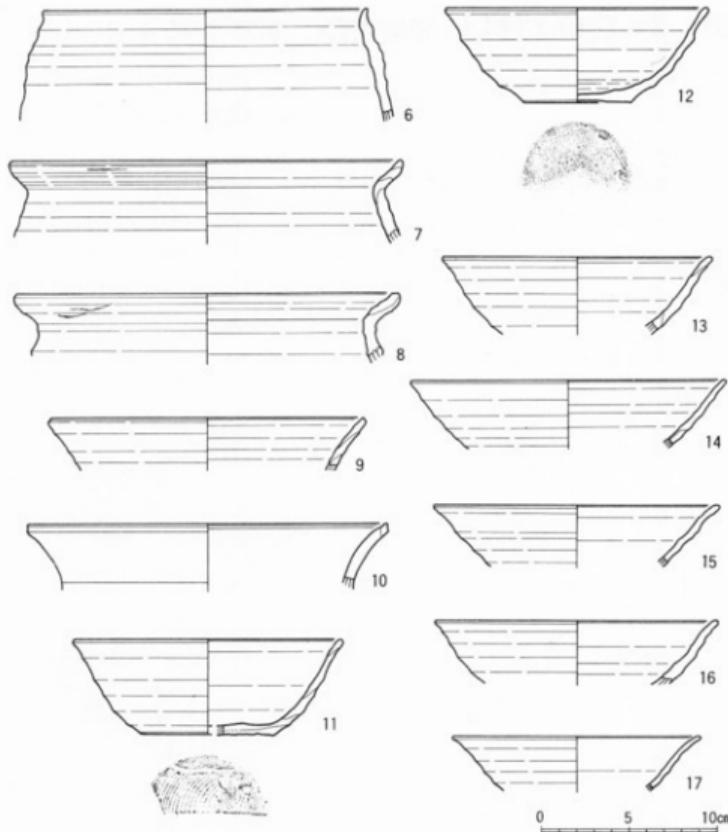
**【グリッド内出土遺物】** 第1号住居跡、第3号住居跡、第4、5号住居跡周辺を中心にして遺物が発見されている。土器としては、土師器、須恵器の壺、甕であり、時期としては9世紀～10世紀にかけて（平安時代）の所産と考えられる。また、土製品として紡錘車が出土している。

**【遺構外出土遺物】** 遺構外出土遺物は、A～B、D～F区にかけて採集されたもの、および排水中から発見されたもので、土師器、須恵器の壺、甕、壺の破片、「生万」の墨書が記された土師器壺等が出土している他、石器として磨石が出土している。



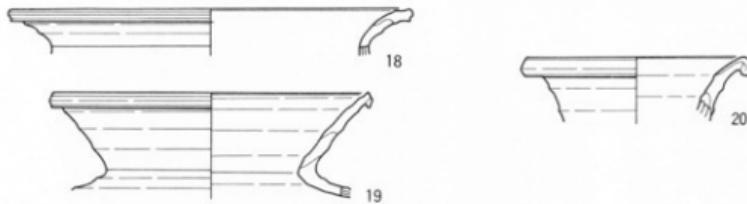
No.	器種	器形	出土場所	内			外			内 径 cm	外 径 cm	厚 さ cm	残 存 状 況	写真 版
				口 部	身 部	底 部	口 部	身 部	底 部					
1	土師器	壺	ワ-36 ワ-37	ロクロナギ	ロクロナギ	-	-	-	-	14.6	15.4	-	(1/8)	
2	土師器	壺	ワ-39	ロクロナギ	ロクロナギ	-	-	-	-	14.3	15.2	-	(1/10)	
3	土師器	壺	ワ-37	ロクロナギ	ロクロナギ	-	-	-	-	13.9	13.2	-	(1/10)	
4	土師器	壺	ワ-37	ロクロナギ	ロクロナギ	ロクロナギ 回転丸切刃	ロクロナギ	ロクロナギ	ロクロナギ	14.8	15.0	3.6	1/2	9-11
5	土師器	壺	ワ-38	ロクロナギ	ロクロナギ	-	-	-	-	13.3	13.2	-	(1/10)	

第21図 グリッド出土遺物① ( ( ) は、残存・推定数値)

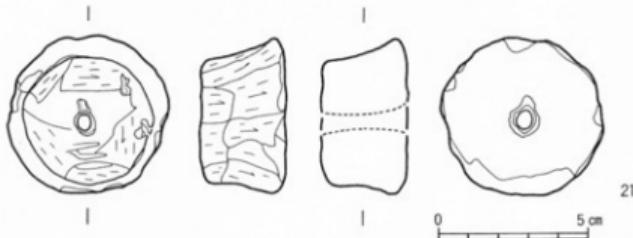


No.	部類	形狀	出土場所	外 周 溝 突			内 面	内 周 溝 突			法 寸 (cm)			写真出版
				口縁部	側 面	底 面		口縁部	側 面	底 面	幅 高	口 径	底 径	
6	土器部	甕	ワ - 37	ロクロナギ	ロクロナギ	-	-	ロクロナギ	ロクロナギ	-	(6.5)	18.4	-	(1/30)
7	土器部	甕	ワ - 37	ロクロナギ	ロクロナギ	-	-	ロクロナギ	ロクロナギ	-	(4.7)	22.2	-	(1/30)
8	土器部	甕	ワ - 33	ロクロナギ	ロクロナギ	-	-	ロクロナギ	-	-	(4.0)	21.6	-	(1/30)
9	土器部	甕	ワ - 37	ロクロナギ	-	-	-	ロクロナギ	-	-	(3.0)	17.8	-	(1/30)
10	土器部	甕	ワ - 37	ロクロナギ	-	-	-	ロクロナギ	-	-	(3.3)	20.4	-	(1/30)
11	土器部	甕	ワ - 35	ロクロナギ	ロクロナギ	ロクロナギ	-	ロクロナギ	ロクロナギ	ロクロナギ	5.4	15.2	7.5	1/5
12	陶器部	甕	ワ - 39	ロクロナギ	ロクロナギ	ロクロナギ	回転系切欠	ロクロナギ	ロクロナギ	ロクロナギ	5.3	14.8	6.2	1/2 9-12
13	陶器部	甕	カ - 42	ロクロナギ	ロクロナギ	-	-	ロクロナギ	ロクロナギ	-	(4.4)	15.3	-	(1/30)
14	陶器部	甕	ワ - 37	ロクロナギ	ロクロナギ	-	-	ロクロナギ	ロクロナギ	-	(3.8)	17.9	-	(1/30)
15	陶器部	甕	ワ - 37	ロクロナギ	ロクロナギ	-	-	ロクロナギ	ロクロナギ	-	(3.5)	16.4	-	(1/30)
16	陶器部	甕	カ - 42	ロクロナギ	ロクロナギ	-	-	ロクロナギ	ロクロナギ	-	(3.7)	16.2	-	(1/30)
17	陶器部	甕	ワ - 37	ロクロナギ	ロクロナギ	-	-	ロクロナギ	ロクロナギ	-	(3.3)	14.2	-	(1/30)

第22図 グリッド出土遺物② [ ( ) は、残存・推定数値]



0 5 10cm



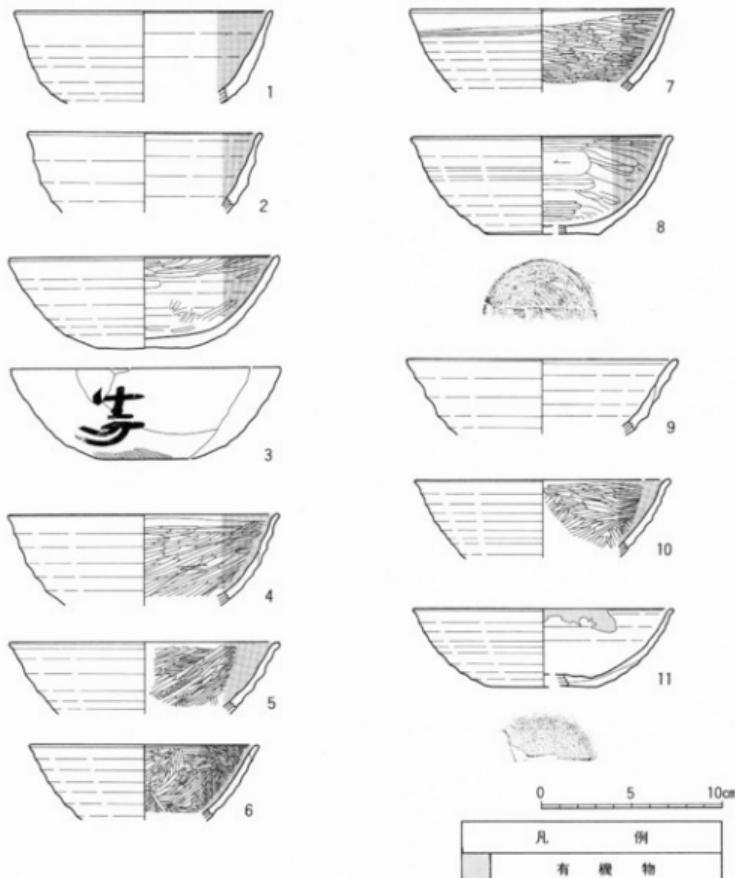
0 5cm



0 5 10cm

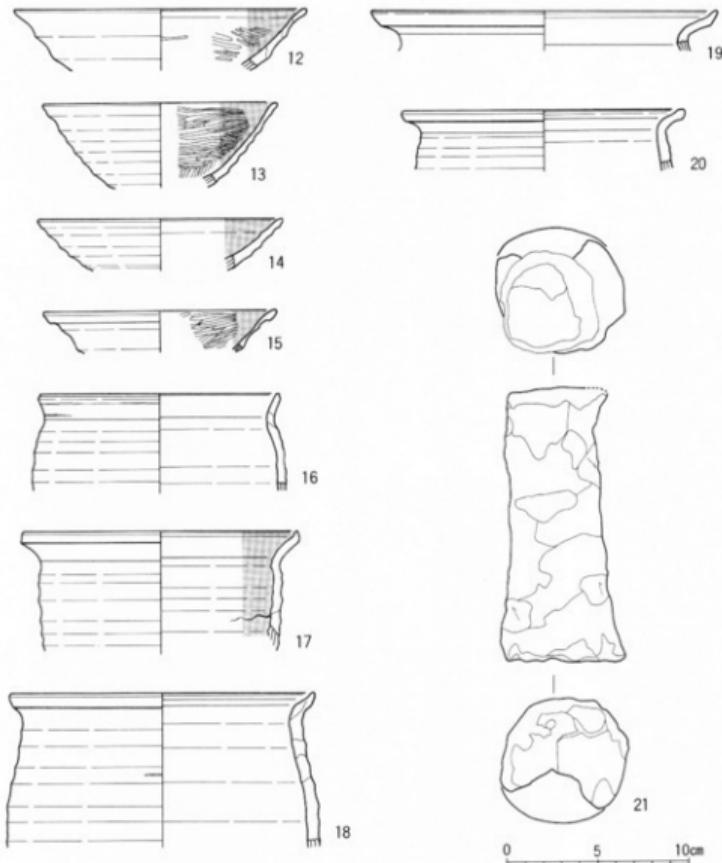
No.	器種	形形	出土場所	外 周 面 溝 突 等			底 周	内 周 面 溝 突 等			法 周 (cm)	残存	写真回数	
				口 棚 高	外 部 形	部 形		部 高	口 棚 高	外 部 形				
18	瓶形器	壺	ワ - 39	ロクロナゲ	-	-	-	ロクロナゲ	-	-	(2.5)	23.6	-	(1/20)
19	瓶形器	壺	ワ - 37	ロクロナゲ	-	-	-	ロクロナゲ	-	-	(5.7)	17.0	-	(1/10)
20	瓶形器	壺	カ - 39	ロクロナゲ	-	-	-	ロクロナゲ	-	-	(3.4)	11.8	-	(1/20)
21	器種	出土場所	表面最大径 (cm)	表面最大径 (cm)	最大径 (cm)	表面溝 突 等	表面溝 突 等	表面溝 突 等	表面溝 突 等	表面溝 突 等	表面溝 突 等	残存	写真回数	
土製鉢輪車			4.3	5.4	2.9	ケズリ		ケズリ				9/10	9-35	
22	器種	出土場所	最大径 (cm)	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	表面溝 突 等	表面溝 突 等	表面溝 突 等	表面溝 突 等	表面溝 突 等	表面溝 突 等	石 材	残存	写真回数
	搬 石		12.5	7.3	2.9	敲打痕、擦痕、擦痕		敲打痕、擦痕、擦痕				8025	完	10-18

第23図 グリッド内出土遺物③〔( )は、残存・推定数值〕



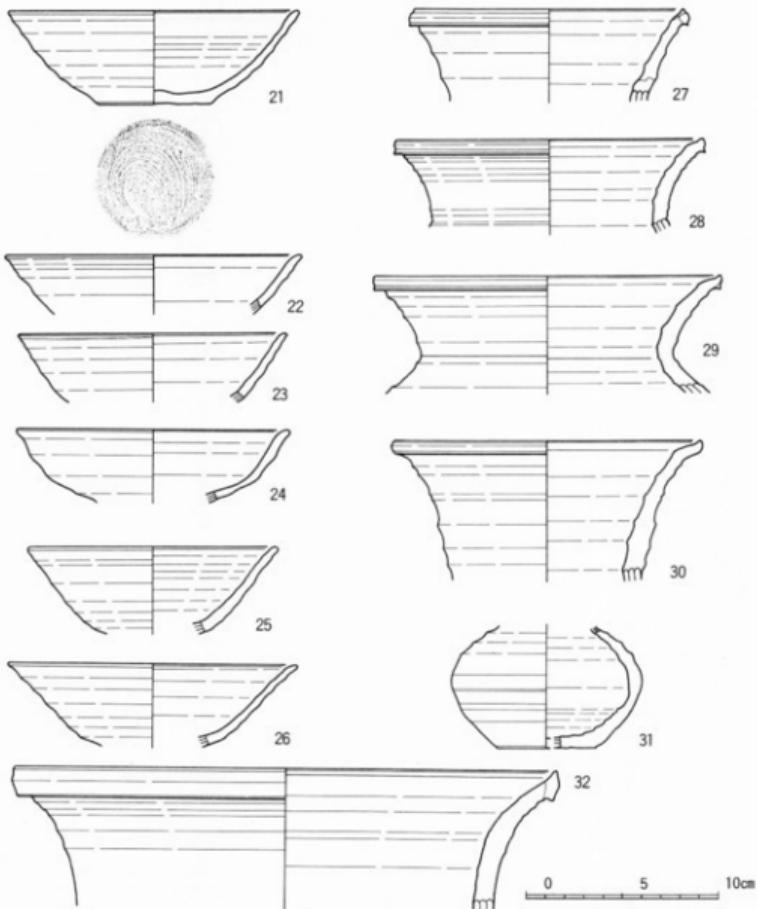
第24図 遺構外出土遺物① [（ ）は、残存・推定数値]

No	部種	形態	生息場所	外 壁 間 隙			乾	湿	外 壁 間 隙			乾	湿	高さ (cm)	口 径	幅	塊 在	写真箇
				口縫	縫合	底			側	底	側							
1	土壁器	疣	透 槽	口ロナダ	ロクロナダ	—	—	—	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(5.5)	14.7	—	(1/5)		
2	土壁器	疣	透 槽	口ロナダ	ロクロナダ	—	—	—	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(4.5)	14.6	—	(1/5)		
3	土壁器	疣	透 槽	口ロナダ	ロクロナダ	—	—	—	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(4.4)	12.8	—	(1/30)		
4	土壁器	疣	透 槽	口ロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	口輪, 刃切り	口輪, 刃切り	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ →黑色斑點	—	5.4	14.4	6.3	1/2	
5	土壁器	疣 (吉澤型)	透 槽	口ロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ ヘルナダ	口輪, 刃切り	口輪, 刃切り	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ →黑色斑點	—	14.8	14.8	5.2	1/2	30-17
6	土壁器	疣	透 槽	口ロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(4.1)	15.0	—	(1/30)		
7	土壁器	疣	透 槽	口ロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ →黑色斑點	—	(5.0)	15.0	—	(1/5)		
8	土壁器	疣	透 槽	口ロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ →黑色斑點	—	(4.2)	14.2	—	(1/30)		
9	土壁器	疣	透 槽	口ロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ →黑色斑點	—	(3.95)	15.0	—	(1/30)		
10	土壁器	疣	透 槽	口ロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ ロクロナダ	口輪, 刃切り	ロクロナダ ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	—	4.3	14.2	6.0	1/3		
11	土壁器	疣	透 槽	口ロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ →黑色斑點	ロクロナダ →黑色斑點	—	(4.3)	12.6	—	(1/30)		



No.	器種	器形	出土場所	外 壁 溝 構 等			底 面	内 壁 溝 構 等			法 墓 (cm)	残 存	写真図版
				口縁部	体 部	底 部		口 縁	内 縁	底 部			
12	土鍋器	片	遺構 当	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ →黒色研磨	ロクロナデ →黒色研磨	—	(3.4)	16.2	— (1/5)
13	土鍋器	片	遺構 当	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ →黒色研磨	ロクロナデ →黒色研磨	—	(4.6)	13.0	— (1/10)
14	土鍋器	片	遺構 当	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ →黒色研磨	ロクロナデ →黒色研磨	—	(2.8)	13.4	— (1/5)
15	土鍋器	片	遺構 当	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ →黒色研磨	ロクロナデ →黒色研磨	—	(2.3)	12.8	— (1/10)
16	土鍋器	片	遺構 当	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ →黒色研磨	ロクロナデ →黒色研磨	—	(5.3)	13.2	— (1/20)
17	土鍋器	裏	遺構 当	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ →黒色研磨	ロクロナデ →黒色研磨	—	(6.5)	15.2	— (1/20)
18	土鍋器	裏	遺構 当	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	ロクロナデ →黒色研磨	ロクロナデ →黒色研磨	—	(8.4)	16.7	— (1/20)
19	土鍋器	裏	遺構 当	ロクロナデ	—	—	—	ロクロナデ	—	—	(2.2)	19.0	— (1/20)
20	土鍋器	裏	遺構 当	ロクロナデ	—	—	—	ロクロナデ	—	—	(3.4)	15.4	— (1/20)
21	器 特	出土地點	—	上面最大径 (cm)	下部最大径 (cm)	高さ (cm)	—	上面 溝 構 等	側面 溝 構 等	下面 溝 構 等	—	—	写真図版
支	盤	—	—	5.5	7.3	15.0	—	面ナデ	—	—	—	—	9-16

第25図 遺構外出土遺物② [ ( ) は、残存・推定数値]



No.	器種	器形	出土場所	外 国 調 整			内 面	内 国 調 整			法 寸	(cm)	残 部	写真回数			
				口縁部	体 部	底 部		口 縁	体 部	底 部							
21	陶器	杯	遺構 外	直 横	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	斜軸	直 切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	4.9	15.0	6.0	1/3	
22	陶器	杯	遺構 外	直 横	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(3.0)	15.5	—	1/80	
23	陶器	杯	遺構 外	直 横	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(3.6)	14.0	—	1/80	
24	陶器	杯	遺構 外	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(3.8)	14.2	—	1/50		
25	陶器	杯	遺構 外	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(4.5)	12.8	—	1/50		
26	陶器	杯	遺構 外	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(4.3)	15.0	—	1/50		
27	陶器	甕	遺構 外	直 横	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(4.7)	14.0	—	1/80	
28	陶器	甕	遺構 外	直 横	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(4.9)	16.0	—	1/80	
29	陶器	甕	遺構 外	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(6.0)	18.0	—	1/80		
30	陶器	甕	遺構 外	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(7.1)	16.0	—	1/50		
31	陶器	甕	遺構 外	—	ロクロナデ	ロクロナデ	斜軸	直 切り	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(6.3)	5.6	1/2	9-13
32	陶器	甕	遺構 外	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	—	(7.3)	28.2	—	1/50		

第26図 遺構外出土遺物③ [ ( ) は、残存・推定数値]

## V. 考察

### ＜遺跡の立地と調査方法＞

- 【1】箕輪山貝塚は石巻市大瓜字棚橋に所在し、標高約20mの丘陵斜面に立地している。
- 【2】箕輪山貝塚は、縄文時代中期～平安時代にかけての複合遺跡である。
- 【3】調査区は、斜面の中腹に設定されたが、この斜面から丘陵上面および南側の丘陵にも遺構・遺物が存在している可能性がある（第2図参照）。

### ＜発見された遺構と遺物＞

- 【1】発見された遺構は、竪穴住居跡5軒、竪穴状遺構2軒、掘立柱建物跡1棟、焼土遺構5基であり、平安時代のものと考えられる。

#### 【2】第1号住居跡について

〔灰白色火山灰〕 第1号住居跡の覆土からは、灰白色火山灰が発見されている。火山灰の堆積は床面直上におよんでおり、床面付近のものについては直接堆積の可能性が強い。しかし、上面のものについては、縞状の水性堆積の様相を呈しており、流れ込みの可能性が考えられる。灰白色火山灰については、県北部起源という説（山田他：1979）と十和田起源という説（町田他：1981）等があり、9世紀後半から10世紀前半にかけて降下したものと考えられている。第1号住居跡の北側周溝から出土した須恵器の环がおよそ10世紀前半に位置づけられることから、この床面直上の火山灰の時期も10世紀前半に位置づけられる可能性が強い。また、石巻市街に所在する田道町遺跡からも同様の火山灰が発見されており、箕輪山貝塚と同時期に存在していた可能性が考えられる。

〔住居跡の構築方法〕 第1号住居跡は直接地山に掘り込まれたものではなく、あらかじめ土砂を入れて均された地盤の上に構築されたものである。すなわち、住居跡を構築する際に①斜面を削り、土砂を掘り出す。②構築面に土砂を入れて平らに均す。③均された面に竪穴住居跡を掘り込む。という過程を踏んだものと考えられる。第1号住宅跡およびその周囲には、このように人工的に造成されたとされる地盤が広がっている。住居跡の構築の際に、このように人工的に地盤を形成する要因はいくつか考えられるが、この場合は、斜面に平坦な床面を構築するためと、水はけを良くするためではなかったかと考えられる。第1号住居跡は、周溝に暗渠を巡らせる等、水はけに気を配っていた形跡が受け取れる。

〔住居跡内施設〕 第1号住居跡からはカマドが2基、焼土遺構2基等が検出されている。まず、2基のカマドであるが、北側のもの（カマドA）からは支脚が出土した他、比較的多くの焼土、炭化物等が検出されたが、南側のもの（カマドB）からは認められなかった。この事実は、双方のカマドの使用方法が異なっていたか、あるいは時期差があったことに起因すると考えられる。また、焼土遺構であるが、特に南側のもの（焼土遺構B）の平面形態が「匁」形を呈して

おり、何らかの上部構造を有していたことが想定される。一方、住居跡北側および東側に設けられた周溝暗渠の存在により、遺構内への水等の流入を防いでいたことも考えられる。このような遺構内の水はけの問題は、斜面に土砂を入れた第1号住居跡の構築方法にも起因していると考えられる。これらの内部施設を見ると、第1号住居跡が、鍛冶遺構であった可能性を示唆し得る。

〔出土遺物〕 土器は、主にカマドA・B内からの出土が目立っている。石器としては、焼けて赤化した鉄の付着した台石状の円礫と、カマドBから発見された大型の砥石がある。台石状の円礫に見られる加工痕は明らかに上面から硬質の工具で打たれたものであり、鉄床に使用されていた可能性が強い。また、砥石の使用面にも鉄の付着が認められ、しかも使用面の磨滅から、比較的長期に渡って使用されていたと想定される。



No.	遺跡名	所在地	分類	種別	時代	施設	出土品
○ 1	箕輪山貝塚	石巻市大字弓削	近隣剖面	基壇	縄文・奈良・平安	田林	土師器、須恵器、瓦片
○ 2	木質圓通路	石巻市御陵字森山	近隣裏	玄合施	平安	山林等	土師器、須恵器
○ 3	内環通路	石巻市御野字木山	近隣裏	貝塚	縄文(?)・奈良(?)・平安	山林等	土師器、須恵器
○ 4	越前川通路	石巻市御野字御前	近隣裏	玄合施	縄文・奈良・平安	堰	縄文土器、土器底、須恵器
○ 5	沼津川通路	石巻市御洋字沼津、平八郷山	近隣裏	貝塚	縄文(?)・奈良・平安	山林等	縄文土器、石器、骨角器、土師器、須恵器
○ 6	鹿島川通路	石巻市吉崎山1丁目	近隣裏	貝塚	縄文(?)・奈良	堰	縄文土器、土器底、須恵器
○ 7	平形川通路	石巻市御洋字平形	近隣裏	貝塚	平安	堰	土師器、須恵器
○ 8	平山川通路	石巻市御洋字平山根	近隣裏	貝塚	平安	堰	土師器、須恵器
○ 9	秦本園貝塚	石巻市宇秦本	浜堤	貝塚	縄文(中)・弥生・古墳・奈良・平安・中世	堰・水井	縄文土器、佐土器、須恵土器、土製品、土織品、須恵器、素手刀、輪軸器
□ 10	桃原寺貝塚	石巻市御洋字御原	近隣裏	玄合施	縄文(前・中)・平安	山林	縄文土器、須恵器、輪軸器、铁器、石器、骨角器
○ 11	池下小学校跡	石巻市吉野町	自然地盤	玄合施	奈良	毛丸	素手刀、土師器、須恵器
○ 12	羽黒東通路	石巻市御野町1丁目	近隣裏	玄合施	平安	堰	須恵器、輪口
○ 13	明神山通路	石巻市御野町2丁目	近隣裏	玄合施	平安	堰	須恵器、輪口
○ 14	御通山通路	石巻市御通町	浜堤	集落等	古墳・奈良・平安	堰・水井	土師器、須恵器、土製品、木簡、須製品、帶合具
○ 15	通水川通路	石巻市御通町	浜堤	集落等	奈良・平安	堰	土師器、須恵器、土製品
○ 16	櫛尾通路	石巻市御通町	浜堤	集落等	縄文・(?)・奈良・平安	堰	土師器、須恵器
○ 17	新金岡通路	石巻市御山町	浜堤	集落等	奈良・平安	堰・毛丸	土師器、須恵器
○ 18	新金岡通路	石巻市御山町新金岡	浜堤	集落等	奈良・(?)・平安	堰・毛丸	佐土器、土織品、須恵器

第27図 箕輪山貝塚周辺の奈良・平安時代関連・製鉄関連遺跡  
(○=奈良・平安時代遺跡、□=奈良・平安時代製鉄関連遺跡)

〔箕輪山貝塚周辺の製鉄関連遺跡について〕前述の事実関係から、第1号住居痕が鍛冶工房として機能を有していたと考えられる。一方、周辺地域における製鉄関係の遺跡を概観してみると、第27図のようになる。一つは、箕輪山貝塚から丘陵縁辺沿いに、北東の稻井地区方面へ点在する遺跡である。これらの遺跡の中には、中世の葛西氏に関連すると思われるものも含まれている。さらに東側の渡波地域にも製鉄に関する遺跡が存在するが、発見例はわずかである。また、旧北上川を越えた南側の日和山（羽黒山）地域からの発見例では、平安時代のものと考えられる遺物に混じって製鉄関連の遺物が発見されている。一方、須江丘陵の東側に位置する新山崎遺跡からも関係する遺物が出土している。須江丘陵上に位置する河南町閑ノ入遺跡からも製鉄関連の遺構が発見されたと聞く。また、新金沼遺跡周辺には、多量の鉄滓が散在している。これらの遺跡は、まだほとんどの遺跡において発掘調査がなされておらず、詳細は不明であるが、石巻市内には奈良・平安時代から近世に至るまでの長期にわたり、鉄生産もしくは鉄の加工を行っていた遺跡が存在していた可能性がある。

#### 【3】焼土遺構について

当遺跡から検出された掘り込みに伴う焼土遺構は5基である。第5号焼土遺構を除いて、土器等の遺物が出土しており、底面に二次使用面が検出されるなど、数回に渡って使用された可能性が考えられるものがある。焼土遺構の性格については、カマド等から検出された焼土、炭化物等の廃棄場所や土器焼成遺構等が考えられる。第4号焼土遺構は、今回の調査では最も遺物の出土が多かった。しかしながら、特に土器の表面の状態の観察では、明確に二次的な焼成は認められなかった。焼土遺構の底面付近からは、土師器に混じって須恵器も出土しており、今回の調査では土器の焼成を行った遺構とは明確には認定し得ない。しかし、底面に二次焼成面等が認められることなどから、火を用いた何らかの施設である可能性は否定し得ない。

#### 【4】遺物について

〔時期〕第1号住居跡北側周溝内から発見された須恵器壺は、10世紀前半のものと考えられる灰白色火山灰直下からの出土であり、この土器を基準に遺跡出土の壺、およびそれに伴うものと考えられる甕等を検討した場合、時期的には9世紀後半～10世紀前半に位置づけられると思われる。近年、河南町須江閑の入遺跡の調査報告により、まとまった遺物の提示が成されたが、当遺跡出土の土器に関しては、時期的にも大きな差異は認められない。

〔墨書き土器について〕発見された墨書き土器については、国立歴史民俗博物館の平川南教授に赤外線写真等を見させていただいた結果、墨書きの篆文は「生万」であろうとのご教示を得た。「生万」の墨書きが記された土器は多賀城跡第60次調査でも発見されており、当遺跡出土のものと同じく土師器壺であり、糸切り痕を有し、9世紀中頃の物と判断されている。「墨書き土器とその字形」（平川：1991）によれば、「生万」という墨書きは「合わせ文字」であり「生」＝生産・集積、「万」＝良好な状態を意味する。こういったことから、「生万」の文字は、所謂吉祥文字と解される。残念なことに、今回発見された墨書き土器は遺構外から採集されたものであり、関連する遺物も出土していない。墨書き土器の背景は、今後の資料の蓄積を待つことにしたい。

## 参考文献

- 山田一郎・庄子貞雄 1979 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」（『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979』）
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」（『科学』51-9）岩波書店
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 「第V章 遺構」（『多賀城跡 政府跡本文編』）
- 窪田藏郎 1983 『考古学ライブラリー15 製鉄遺跡』 ニューサイエンス社
- 茂木好光 1983 「遺跡紹介 石巻市箕輪山貝塚を見て」（『あをなく碧河>』第1号） 石巻郷土研究会
- 宮城県河南町教育委員会 1984 『須江糠塚遺跡 河南町文化財調査報告書第1集』
- 仙台市教育委員会 1987 『五本松窟跡 仙台市文化財調査報告書第99集』
- 宮城県矢本町教育委員会 1987 『赤井遺跡 第1次発掘調査報告 矢本町文化財調査報告書第1集』
- 石巻市教育委員会 1988 『五松山洞窟遺跡－発掘調査報告－ 石巻市文化財調査報告書第3集』
- 潮見 浩 1988 「V 金属器」（『図解 技術の考古学』 有斐閣選書） 有斐閣
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1989 『柏木遺跡 I 多賀城市文化財調査報告書第17集』
- 宮城県河南町教育委員会 1990 『須江関ノ入遺跡 河南町文化財調査報告書第4集』
- 宮城県教育委員会他 1990 『野田山遺跡 宮城県文化財調査報告書第145集』
- 宮城県矢本町教育委員会 1990 『小松遺跡 赤井遺跡 矢本町文化財調査報告書第2集』
- 平川 南 1991 「墨書き土器とその字形－古代村落における文字とその実相－」（『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』）
- 石巻教育委員会 1992 『田道町遺跡－A地点発掘調査概要－石巻市文化財調査報告書第4集』
- 村田晃一 1992 「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」（『大戸窯検討のための「会津シンポジウム」東日本における古代・中世窯業の諸問題』資料）
- 石巻市教育委員会 1993 『田道町遺跡－B・C地点発掘調査概報－石巻市文化財調査報告書第5集』
- 宮城県河南町教育委員会 1993 『須江窯跡群 代官山遺跡 河南町文化財調査報告書第6集』
- 宮城県河南町教育委員会 1994 『須江関ノ入遺跡 河南町文化財調査報告書第7集』
- 村田晃一 1994 「土器からみた官衙の終末－東北地方の場合－」（第3回東日本埋蔵文化財研究会『古代官衙の終末をめぐる諸問題』資料）

# 写 真 図 版

第 1 図 版

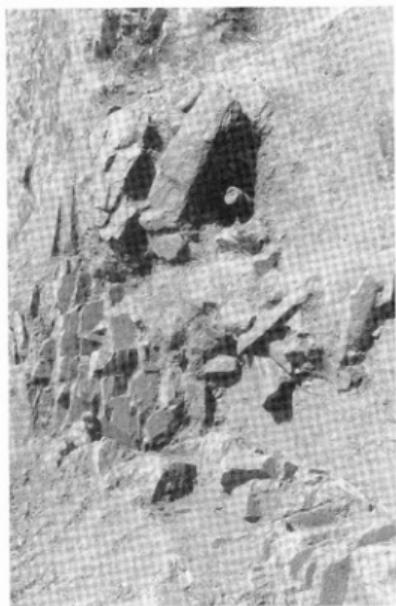


調査区遠景（南から）



道路周辺空中写真

第2図版



第1号住居跡カマドA（西から）



第1号住居跡カマドA・カマドB（西から）



第1号住居跡（西から）



第1号住居跡カマドB（西から）

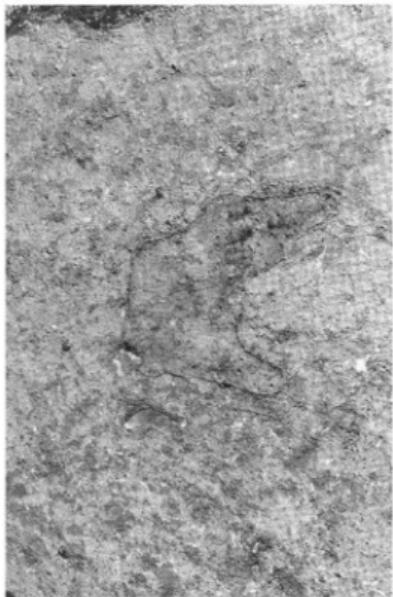
第3図版



第1号住居跡カマドA付近土層堆積状況（南から）



第4号住居跡（北東から）



第1号住居跡焼土範囲B（東から）



第2号住居跡・第1号竪穴状遺構（北から）

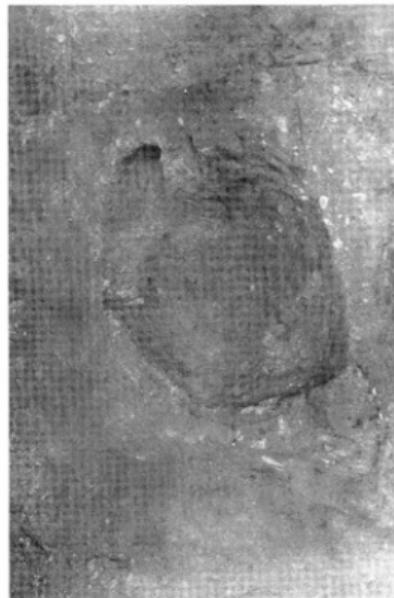
第4図版



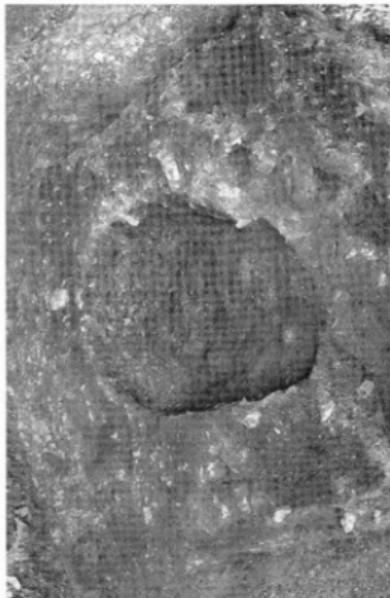
第1号焼土遺構断面断ち割り状況（南から）



第2号焼土遺構断面断ち割り状況（南から）

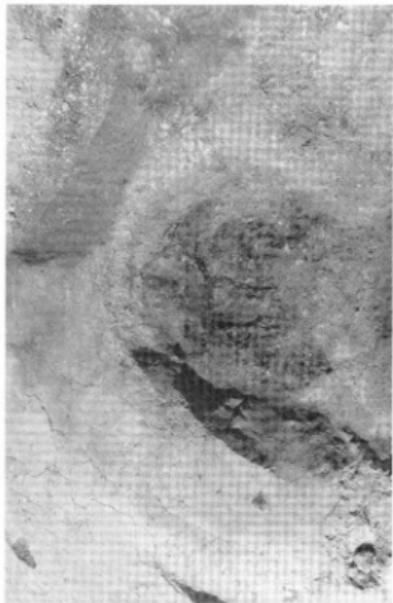


第1号焼土遺構（南から）

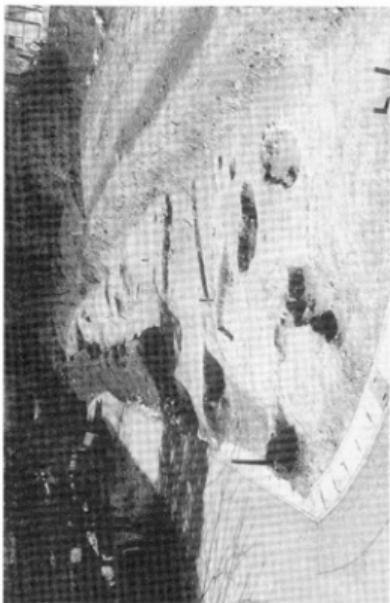


第2号焼土遺構（南から）

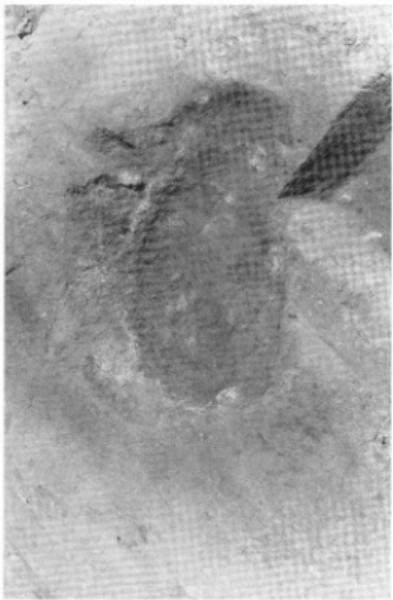
第5図版



第4・5号焼土遺構（南東から）



調査区C区～F区（東から）

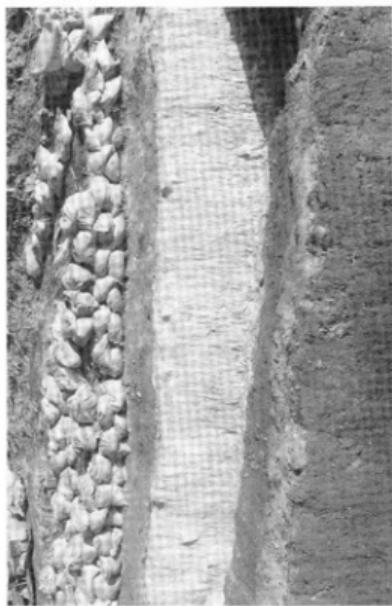


第3号焼土遺構（南西から）



調査区D区～F区（西から）

第 6 図版



第 1 号住居跡土層削除作業状況②



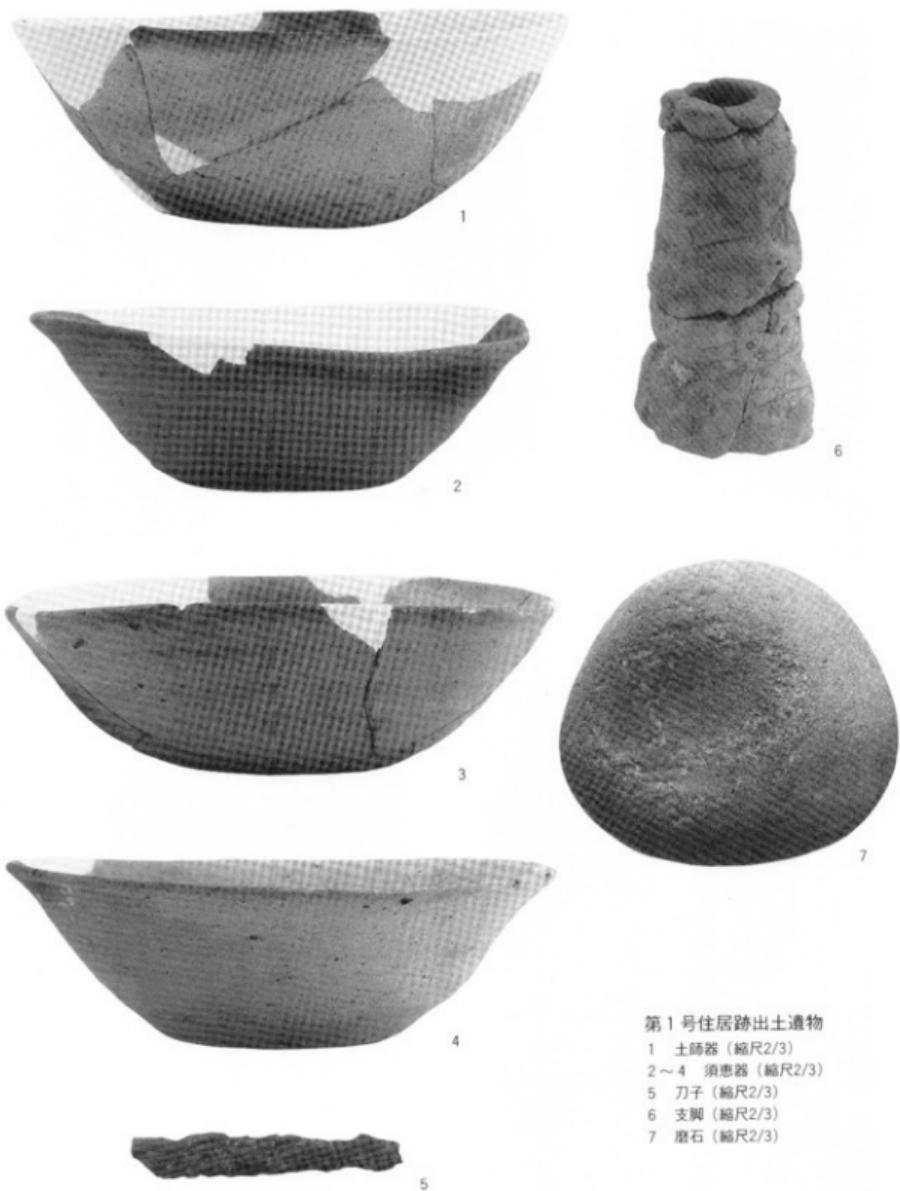
第 1 号住居跡の削除された土層



第 1 号住居跡土層削除作業状況①



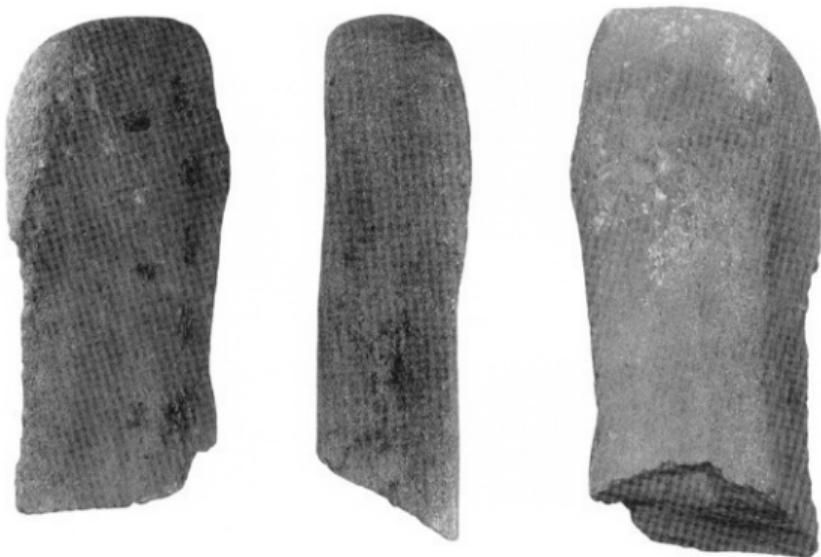
第 1 号住居跡土層削除作業状況③



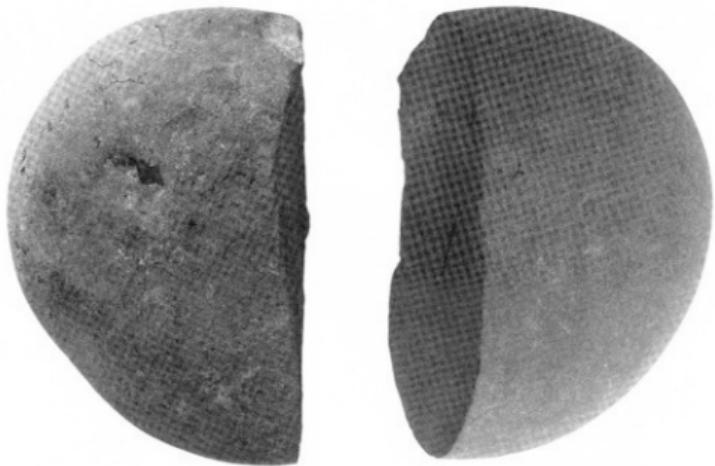
第1号住居跡出土遺物

- 1 土器 (縮尺2/3)
- 2~4 須恵器 (縮尺2/3)
- 5 刀子 (縮尺2/3)
- 6 支脚 (縮尺2/3)
- 7 磨石 (縮尺2/3)

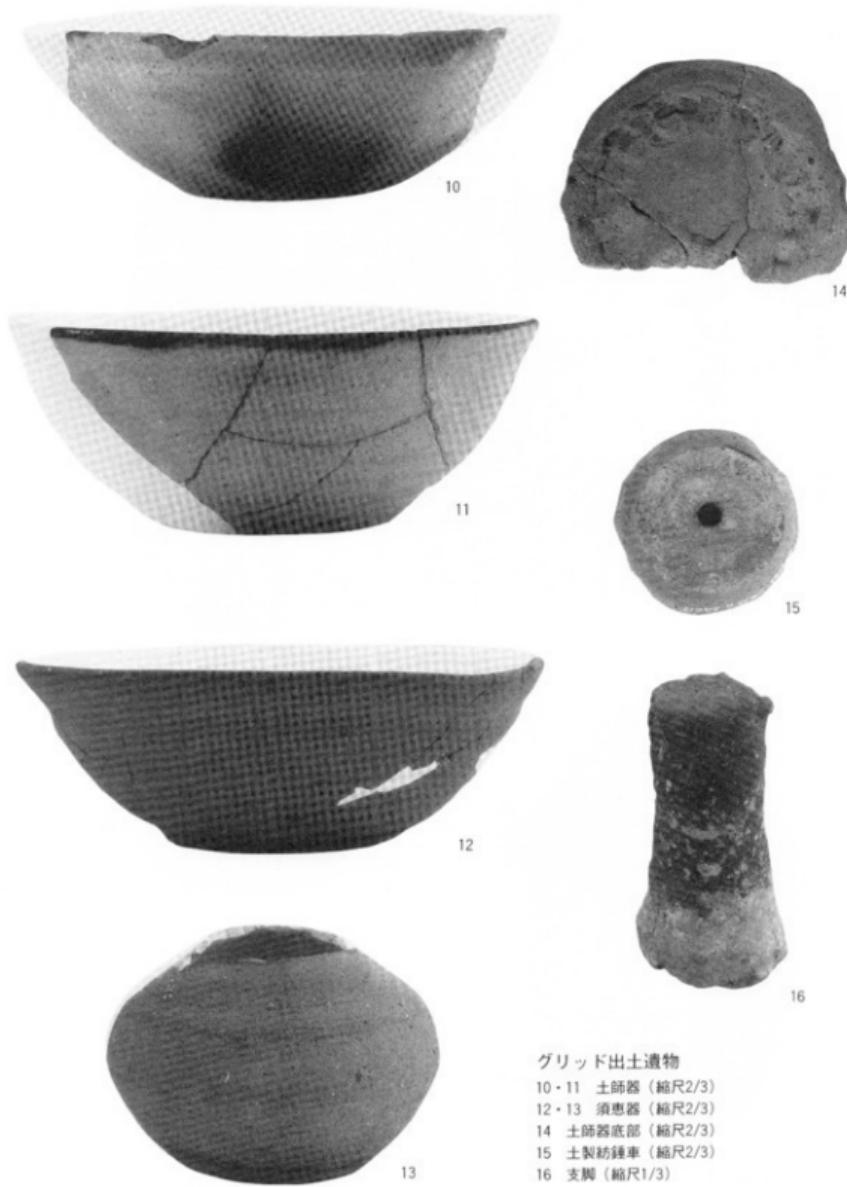
第 8 図 版



8 第1号住居跡出土砥石  
(縮尺1/4)



9 第1号住居跡出土台石状円錐（鉄床）  
(縮尺1/4)



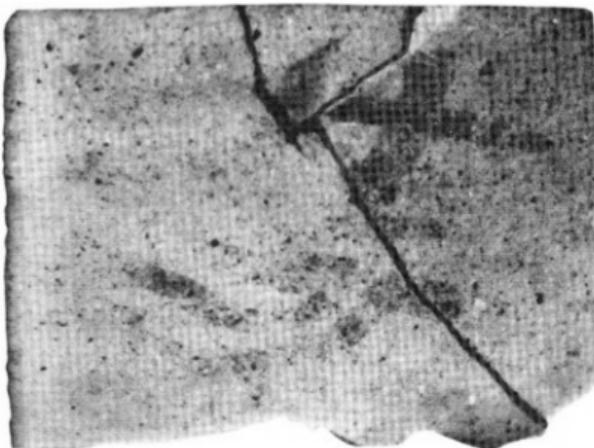
グリッド出土遺物

- 10・11 土師器（縮尺2/3）
- 12・13 須恵器（縮尺2/3）
- 14 土師器底部（縮尺2/3）
- 15 土製紡錘車（縮尺2/3）
- 16 支脚（縮尺1/3）

第10図版



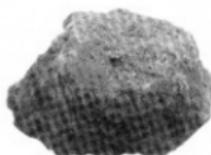
17 (縮尺2/3)



遺構外出土墨書き土器



遺構外出土磨石 (縮尺2/3)



遺構外出土羽口 (現寸)



遺構外出土繩文土器 (現寸)

# 報告書抄録

ふりがな	みのわやま							
書名	箕輪山							
副書名	石巻市大瓜箕輪山貝塚における埋蔵文化財調査報告							
卷次								
シリーズ名	石巻市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	木暮亮							
編集機関	石巻市教育委員会							
所在地	〒986 宮城県石巻市日和が丘一丁目1-1 電0225-95-1111							
発行年月日	西暦1995年3月17日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	°		m <sup>2</sup>	
みのわやまかへづか 箕輪山貝塚	みやぎけん 宮城県 いしのまち 石巻市 おうりあはたなほし 大瓜字棚橋	65	041	38 26 56	141 18 39	1993.11.18 — 1994.03.31	1,400	福井地区老人福祉施設にかかる道路建設に伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
箕輪山貝塚	集落跡	平安	堅穴住居跡	5軒	土師器、土師器墨書き土器(环)			
			堅穴状遺構	2軒	須恵器、支脚、羽口、土製纺錐			
			掘立柱建物跡	1棟	車、刀子、釘、石器			
			焼土遺構	5基				

---

石巻市文化財調査報告書第6集

## 箕輪山

—石巻市大瓜箕輪山貝塚における埋蔵文化財調査報告—

1995(平成7)年3月24日発行

編集 石巻市教育委員会

発行 石巻市教育委員会

〒986 宮城県石巻市日和が丘一丁目1番1号

☎ 0225-95-1111㈹

印刷 株式会社 鈴木印刷所

〒986 宮城県石巻市蛇田字新谷地前121

☎ 0225-22-4101㈹

---

1995 ©